
はぴ すた ~Happy Star?~

窪田誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はぴ すた く Happy Star? }

【Nコード】

N1886T

【作者名】

窪田誠

【あらすじ】

幼い頃に両親を失った主人公、睦樹^{むつき}。

そんな彼が十年ぶりに、長く離れていた町へと戻り、陵桜学園に通い始める。

そこで彼が見つける「かけがえのないものたち」とは？

この作品は『らき すた』^{ファンフィクション}FFです。

また同作者のもう一つのFF「らき すたSS」くらつきーれっすん」とは完全な別作ですが、元ネタ等共通するため似通った表

現があることをご理解の上、お読み頂ければ幸いです。

プロローグ（前書き）

くぼた允 改め 窪田誠と申します。

おひさしぶりの方、はじめましての方、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ

「久しぶりだなあ。この町に帰って来るのも……」

春先の明るい陽光に照らされた懐かしい景色を自動車の窓越しに見ながら、僕は思わずつぶやいた。

埼玉県南東部に位置するこの町の今の名称は『こよみ町』。

十年前、僕がまだここに住んでいたときは漢字で『暦町』と書いたが、三年前の市町村合併で近くの市に吸収され、それに合わせて表記をひらがなに変えたらしい。

もっとも、変わったのはそれくらいで、流れるように去って行く風景は昔のままだ。

幼馴染と一緒に遊んだ公園も、子猫を助けるために登った高台の大きな木も、その全てが僕には忘れえぬ大切な記憶……。

「はっはっはー！ なに言うとなんの、睦樹^{むつき}。ここはこよみ町ちゃうでー？ お隣の『しわす町』やんか！ こよみ町は、まだもーちょい先や！」

……………。

まあ、あれだ。

人生には、そういうこともある。

目的地に着くと、僕は何も言わずに自動車の助手席から降りた。

「……あー。なんやその、わ、悪かったな？」

そんな僕に、気まずそうに頬をほりほり掻きながら声をかけるのは、ここまで僕を乗せて運転して来てくれた黄色い髪の女性。

「せやけど、アンタもあかんのやで？ あのタイミングであんな言われたら、どーしたってボケたんかと思うやん？ そりゃツツコんでまうわ。……だからまさか本気とは思わへんかってん」

「も、もういいってば、なな姉っ！ これ以上、僕の傷口を広げないでっ！？」

どーにもこーにもイイ加減だったらしい僕の記憶。

今、改めて思い出して見ると「あー、そういえばあの公園。僕がいた頃すでに整地されて駐車場になってたなー」とか「あの木も、確かかみなりが落ちて燃えちゃったんだっけ」などと、懐かしくも切ない記憶がちゃんとある。

「……なんや、むつき。怒ってへんのん？」

「へ？　なんで？　別に怒ってなんかいないよ」

「そーかー！　やー、あの後アンタ変に無口になってもうたから」
しゃべらなかつたのは、単に恥ずかしかったからだ。……今思い出しても、顔から火が出そう。

「……ちょーっち焦ったで。なんか損した気分やなっ！」

そう言つて「なはははっ」と笑い、僕の背中をバンバン叩くこの女性ひとの名前は黒井ななこ。

僕が小学生くらいの時からの知り合いで、何かと気安いため昔から「なな姉ねえ」と呼び、慕っている。

女性としては背が高くスタイルも良い、三百六十度どこから見ても完璧な美人だ。

「……あとは性格さえなんとかすれば絶対モテるのに。なんだか残念だよね、なな姉って」

「なん……やと……！？　そないなこと言っやなんて、やっぱ怒っ
とるんやないの、むつきっ！？」

……マズい。

頭の中で考えていたことが、途中からダダ漏れていたようだ。

「アカン……ウチもう駄目や。実の弟と思うて可愛がってきたむつきにあないな暴言吐かれるなんて、立ち直られへん」

口から何か白いモヤモヤした煙みたいなものを出して膝から崩れ落ちたなな姉が、そのままコンクリートの地面に四つん這いになる。
「うぐうっ……ひっぐ、ひっぐうっ！」

そして、ボツロボロ泣き始めた。

涙が落ちた部分のコンクリートが、すごい速さで白灰色から濃いグレーに変わっていく。

放っておいたら比喻じゃなく本当に水溜りが出来そうな勢いだ。

「う、うわー……」

長い付き合いで、なな姉の色んな姿を知っているつもりの僕だったが、まだまだ認識が甘かったらしい。

こんな、あられもなく号泣するなな姉を見るのは初めてだ。

気の置けない仲であることを差っ引いても大人の女性、今はラフなＴシャツに薄手のジャケット、ジーンズという男性的な服装だが、ちゃんとお洒落して街を歩けば男性の目を必ず惹きつけるだろう美人さんが顔をぐちゃぐちゃにして嗚咽する姿に、正直僕は一瞬引いた。

が。

「な、なな姉っ！ さっきのは違うんだっ！？ ……ええっと、そう！ 残念なのはなな姉じゃなくて、見る目のない男の人がって言うつもりだったんだよー！」

すぐに気を取り直し、なな姉をなだめにかかる。かなり苦しい言い訳になるが仕方ない。

今僕たちがいるのは、とある民家のガレージだった。

「ガレージ」と言ってもそんな立派なものじゃなく、普通車一台がなんとか入るくらいのスペースがあるだけで、一応屋根はついているものの周りの目隠しになるようなものは特にない。

おまけにこの辺りはいわゆる住宅街。それほど人通りがあるようにも思われないけれどいつ何時散歩中の近隣住民が訪れ、なんの気無しにここを覗かないとも限らない。

その時、老夫婦（ご近所さん。カツコ飯）が目にするのは、四つん這いで泣き崩れる妙齡の美女とそれを見下ろす十歳は年下の若い男。

……近所にあらぬ噂が立つことは必然だ。

「ひつく……でも、その前に『性格さえなんとかすれば』とか言う
とったあ……」

僕の言葉（言い訳）に、まだ目に涙は浮かべているものの、泣く
のはやめてくれたなな姉が反応する。

よし、まずは成功。しかし、僕が年上の女性を手玉に取ったあげ
く飽きたらポイ捨てするような極悪人だという噂が流れるのを阻止
するためには、次の言葉も慎重に選ばなくてはならない。

なんだか僕の被害妄想のような気もするけれど、とにかく今は集
中だ。

「それはね、なな姉。……その通りだとしか、言
い様がない」

そして集中した結果僕の口から出てきたのがこれだった。

アホの子か。僕は。

その後、白目をむいて気絶してしまったなな姉を家の中へ半ば引
きずるように運び込み、危うい記憶を頼りに押入れから布団一式を
出して寝かせたところで僕の意識はぶつつり途切れた。

まだ日暮れにも早い時刻だったが、昨日色々考えたり思い出した
りしていたせいで良く眠れなかったのと、慣れない車での長距離
移動が自分の意識以上に堪えていたんだと思う。

そして僕は夢を見た。

夢のなかの僕は今よりもずっと小さく、新品のランドセルを背負
いニコニコ笑いながら家の中で跳ね回っていた。そんな僕を、父さ
んと母さんが目を細めて見守っている。

これは、そう。昔、十年前実際にこの家であつた出来事だ。

幼い僕が、まだこの世界の不幸な出来事は全てテレビの向こう側で起こるのだと、愚かにもしかし幸せに信じていた最後の日。

眠りながら、僕は泣いていたらしい。

目覚めると枕が濡れていた。

一瞬「あれ？」と思ったが、その枕がとても素敵だったので頭から吹っ飛んだ。

硬過ぎず柔らか過ぎずほどよい弾力。指で押すとぷにぷにして気持ち良く、つぶれないで元の形に戻る。そしてどういう仕組みになっているのか人肌の温かさで、顔をうずめるとトロけそう。……ぶっちゃけ、これが枕でないことにはもう気づいていたが、なんだかすごく良い匂いもするし離れたくなかった。

「……うん。二度寝しよう」

枕に顔をうずめたまま決意の言葉を口にした僕の後頭部の辺りから。

「うん。させへんよ？」

僕の決意を挫く声が聞こえてきた。

どうやら、この「枕」も目を覚ましていたようだ。

……ちっ！

「まったく、ウチの胸は枕ちゃうつちゅーねん」

そう言つと枕……もとい、なな姉は布団からがばつと勢い良く起き上がり、ううーんと大きく伸びをした。

「のわぴっ！？ ひ、酷いよなな姉……」

起き上がられた拍子に、僕は僕の大切な二つの膨らみからその身を離され、勢い余って床で頭をしこたま打った。ここが和室で畳だったのがせめてもの救いだ。

「酷くあらへん！ 人の胸枕にしたあげくいぢくりまわしとる方がよっぽど酷いわっ！？」

その通りなので何も言えなかった。

「おまけになんや濡れとるし……よだれ？」

違う、と言いたかったがちよつとだけ「……そうかも」と思ったのでやっぱり何も言えなかった。

「……まー、ええわ。ところでなんでウチ、寝とったん？ 車止めた後の記憶が無いんやけど……ヘンやなあ？」

「そ、それはアレだよ。なな姉ったら家に着くなり眠っちゃったのさ。疲れてたんじゃない？」

非常に都合良くな姉が気絶前の記憶を失ってくれていたので、僕はこれに乗じて事実の捻じ曲げにかかる。

……でももしかして、もう一度気絶させればさっきのことも忘れてくれるかも？ という考えもふと頭を過ぎった。そーしたら、ついでにまたあの素晴らしい枕の感触を楽しめるかも知れない。次は適度にたんのーした後、なな姉の気がつく前にそつと布団から出ておけばいいのだ。

どうしよう？ ……そう言えば玄関に古いゴルフセットが置いてあった気がする。

「そーやったんか？ ああ、それで寝入ったウチをむつきが運んでくれたわけやな？ で、アンタも疲れとったんで一緒に眠ってまったってコトか」

「う、ウン。そんなところかな」

とは言え、胸をアレコレしてしまったことにそれほど怒ってはいないみたいだし、なによりこれ以上なな姉を傷つけたくない。言葉ではもちろん、ドライバーで殴って気絶させるなんて論外だ。

後ろ髪を引かれる想いはあるものの、僕は（気を失った後に関しては）かなり正確に理解してくれたなな姉の言葉に、素直にうなずいておくことにした。

「にしても、今何時や？ ……あーもう九時過ぎてんねんなあ。ずいぶん長く寝てもうてたみたいやわ」

携帯で時間を確認したなな姉がつぶやく。

なな姉を引きずってこの部屋に入ったとき、薄暗かったから明かりをつけておいたんだけど、そのせいで僕もあれからそんなに時間が経っていたとは思っていなかった。

確かに、来たばかりのときはぼんやりとだが光を通していたはずのカーテンも、今はガラス越しの闇を映したような少し暗めの色合いに見えた。

その刹那。体の奥から湧き上がってきた恐怖を抑えるため、僕はぎゅっと目をつむる。

「ホンマは今日中に荷物の整理やらなんやらしときたかってんけど……ン？　むつき、アンタなにしてんねん？」

「あ、あはは。なんだか目が痛くて。寝起きだからかな？　……ふるっひょうつ、ふるっひょうつ！　ダバダバダ、ダバダバダッ！！？」

何もしないでいると体も震えだしそうだったので、それを誤魔化すため僕は不思議な踊りを踊った。

意味のない掛け声とともに肘を曲げた両腕を激しく上げ下げ、そして足では力の限りタップを踏む。

「……………ホンマ、何しとるん」

……それは自分でもわからない。

なな姉の完全に引いた、氷のような視線を浴びながら動き続けること約五分。

疲労と羞恥に駆逐され、僕の体を支配しようとしていた恐怖はどこかへ去った。

これで、とりあえずは安心だ。

「ふう。良い汗かいたっ！」

「……さあーて、そんならそろそろメシにしようかー？」

さわやかに汗を拭う僕をなな姉が軽やかに無視してくれる。

どうやら、今の僕の行動は無かったことにしたいらしい。

僕としても実にありがたい。……多少の、やるせなさは残るけれども。

「メシ、言つてもそーいや食べるもんじゃないな？　こんななら先に買つとけば良かったで。……しゃーない、ウチちよつとコンビニ行つて適当になんか見繕つてくるわ。せやからアンタは留守番ヨロシク」

「待つてっ！　……あの、僕も一緒に行く！」

片手を挙げて部屋を出て行こうとしたなな姉に僕は慌てて声をかけた。

「な、なんや？　そんな血相変えんでもエエで。ほな、一緒に行こかー」

意外とあつさり申し出を了承してくれたなな姉の後について行きながら、僕は密かに胸を撫で下ろしていた。

この場を借りて告白するが、僕は夜が怖い。正確には、夜の訪れとともにやつて来る暗闇が怖い。

我ながら十六歳にもなつて情けないとは思うけど、怖いものは怖いんだからしょーがないのだ。……ちなみに、このことはなな姉にも誰にも内緒。

それでも最近はわりとマシになってきていたはずだった。でも、今はダメだ。

さつき和室のカーテンを見て、はつきりと思い出してしまった。

十年前のあの日。郊外のショッピングモールへ買い物に行くという両親に、僕は珍しくついていかなかった。なにかちよつとしたことで機嫌を損ねていたんだと思う。それまでも何度かそういうことがあったから、父さんと母さんは心配そうな顔をしつつも僕に留守を任せてくれた。「すぐに戻るよ」と言い置いて。僕は返事をしなかった。

二人が出かけた後、あの和室で眠ってしまった僕は目を覚ますと、すぐに両親を探して家中を歩き回った。もう帰ってきていると思ったのだ。すでに外は暗くなり始めていた。

しかしいくら探しても二人は見つからず、僕はにわかに襲つてき

た不安に耐えるため和室に戻ってずっと膝を抱えて震えていた。その間、何度か電話が鳴ったが出なかった。

そして結局その日、父さんと母さんが家に戻って来ることは無かった。僕は夜通し電気もつけず眠ることもできず、ただただ二人の帰りを待っていた。不安と恐怖で、押しつぶされそうだった。

翌朝、空が白みかけた頃、玄関のドアが開く音が聞こえた。疲れてまどろみかけていた僕はすぐに走って玄関へ向かった。二人に文句を言っと思ってやろうと思った。『すぐもどるっていったのにっ！』

でも、僕がその言葉を発することはなかった。玄関にいたのは父さんでも母さんでもなく、知らない男の人だった。

この後のことは良く覚えていない。何を見て、何を考えたのかもあやふやで明確に形を成すものは何もない。確かなのは、この日以来僕が必要以上に暗闇を恐れるようになったということだけだ。たぶん、父さんと母さんと、もう二度と会って話すことが出来ないとうことをちゃんと理解するようになったのも、これよりずっと後になってからだったように思う。だって、それからしばらくの間、僕はずっと考えていたのだ。次に二人に会ったときこそ、ちゃんと文句を言ってやるんだ、と。

コンビニから戻って少し遅めの夕飯を例の和室で食べる終えると、僕の知らないうちに大量に買い込んだ缶ビールを手にしたなな姉は「っかー！ やっぱホンモノはちゃうわー！」などとわけのわからない感嘆とともにガツガツ飲み干し、「……なんでやねん。なんでウチはぜんっぜん、モテへんねんっ！？」おっ、男なんてクソクラエやあっ！！ あははははははは……ぐすん」と何上戸なのかはつきりしない乱れ方をした後、そのまま仰向けに倒れてぐーぐー寝てしまった。

そんななな姉を敷きっぱなしにしておいた布団に投げ入れ、僕も

一緒に布団入るべきかどーするべきか悶々しながら部屋をぐるぐる歩き回っていた時、ふと四隅にある柱のうち一本が他に比べて妙に汚れているのに気がついた。

近づいて良くみると、そこにはボールペンで無理矢理つけたような幾つかの縦並びの横線と、それに合わせて書いたらしい文字が同じように黒で彫り付けられていた。かすれて消えかけているものもあったが、それでもしっかり読み取ることが出来た。

『むつき 一歳 つかまりだち』

『むつき 二歳』

『むつき 三歳』

『むつき 四歳 泣きながら』

『むつき 五歳』

『むつき 六歳 おおきくなった』

このキズは毎年、元旦に父さんがつけてくれた僕の成長記録。元旦だったのは、その日が僕の誕生日でもあるからだ。

「……あ、ぐう！」

あ、あれ？ おかしいな？

「う、ううっ、ううううっ！」

そんなつもりは全然ないのに、なぜだか涙が溢れて来る。

溢れて溢れて、止まらない。止めようとして体に力を入れると今度は「っぐ、ひっぐ！」みたいな嗚咽が漏れてしまう。

……戻って、来れた。

なんだか急に、実感が沸いて来る。

「う、ううん……？ うー、むつきい？ そんなスミッコで何してるん……」

僕の泣き声でなな姉を起こしてしまったらしい。

申し訳なくて謝ろうと思い、なな姉の顔を見たらもう、ダメだっ

た。

「っ……なな姉っ！！　も、もどつて、ヒック、来れたよう僕、この家うちにいっ！！　……っうう、うううううううっ！」

「む、むつき！？　……ああせやな。嬉しいなあ？　なあ、むつき。アンタよう……頑張った」

いきなり胸に飛び込んで小さな子供みたいにわんわん泣いてしまった僕を、なな姉は最初戸惑ったようにしつつも、すぐにぎゅっと力強く抱きしめ、優しく声をかけながら頭を撫でてくれた。……ちよっとお酒くさかったけど。

父さんと母さんがいなくなったあの日から、僕の周りで僕にこんな風に接してくれるのは、なな姉だけだ。

他の人たちは……いや、やっぱりやめておく。僕にあの人たちの悪口を言う資格は無い。

僕も似たようなものだし、おまけに両親を失い天涯孤独になりかけていた僕を拾ってくれたのだから。

あの『三世院』の人たちは。

あまり一般には知られていないことだが、関東圏の政治経済の掌握権をかけて覇を競う、幾つかの『家』がある。

そのうちの一つ、神奈川県を本拠地とした三世院家さんぜいんけの養子というのが、今の僕の立場だ。

三世院の表向きの顔は古来より神主を生業とした神道の家系だが、その裏では常に時の権力者につながり富を築いてきた。それが現在まで続いており、それだけでも普通の人たちから見れば十二分に贅沢で何不自由ない生活を送っているのだが、今の一族は現状に満足しなかったらしい。

より多くの金銭を得、またそれに付随してくる権力をさらに強固に磐石にするため、彼らはとある計画を練り、実行した。

そしてその一部が、身寄りの無い子供たちを引き取りその子たちを「教育」して世に送り出すこと。

字面だけならとても立派な行いのように思える。でも、実際はそんなイイものじゃなかった。

ようするに、これは「教育」の名を借りた「洗脳」なのだ。

子供たちを三世院の利益のためだけに行動する「エリート」に仕立て上げるための。

……だから。

その方針に従わない反抗的な子供や、勉強についていけず「無能」と判断された子供たちは容赦なく、切捨てられた。本来それは秘密裏に行われ、切捨ての対象になった子たちはいつも「いつの間にか」いなくなっているのが常だったのだけど、僕は三世院に来てまだ間もない頃、ちよつとした偶然から「それ」を目撃したことがある。

そしてそのすぐ後だ。なな姉と出会ったのは。

僕は古今東西いかなる神様も信じてはいない。けれどもし、本当にそんな存在があるのだとしたら、この時僕をなな姉と引き合わせてくれたことだけは心の底から感謝したいと思っている。

おかげで、僕はなんとか壊れずここまで来れた。

何人もの、「そうであつたかも知れないもう一人の自分」を見捨てながら。

「それにしても……よくあの人らが許可したもんやなあ。一時的とはいえ、アンタを自分らの手元から離すやなんて、正直今でも信じられんわ」

胸の中でひとしきり僕を泣かせてくれたなな姉は、僕が落ち着いたのを見て口を開いた。

「……うん。僕もそう思う。でも、約束だったから……」

なな姉の言葉に同意しつつ、僕は以前なな姉には話したことのあ

る、三世院と交わした約束について改めて語った。

「『十年間、僕が三世院の子供たちの中で一番の成績を取り続けたら、少しでいいから元の家に帰らせて欲しい』。そう今代と約束したんだ。……本当に守られるかどうかは僕も半信半疑だったけど」

「今代^{こんだい}」というのは、三世院の現当主で僕の義父に当たる人。他の人もみんな「今代」や「当主」と呼んでいるので、僕もそれに合わせている。

「……今代は、三世院の中ではわりと『普通』の人だから」

「けどそのせいで、今の当主はお飾りって話やんか？ その人が許しても他の奴らが黙ってないような気がするねんけど……。むつき、アンタその約束きっちり守ってまったおかげで、子供らの中じゃ特別目えつけられとるのやろ？」

……そうなのだ。残念ながら、なな姉が言ったことは全部事実で、今代は当主と言っても家の中での発言力はあまりない。だから、今回のことも彼の一存で決まったわけではないだろう。そしておそらく、僕を「そこそ使えそうな手駒」くらいに考えている誰かの意志も確実に入っているはずだった。

それは僕の編入する高校をわざわざ指定してきたことから明らかだ。

でも、三世院にどんな思惑があるにせよ、僕は今のまま唯々諾々と彼らの手駒であり続けるつもりはない。そのために、小・中学校と高校一年の間、彼らが運営する教育機関で文字通り「死に物狂い」の生活を送ってきたのだ。

あとは、例えわずかだとしても三世院から「自由」になったこの機会を最大限に利用して僕があの家を、潰せばいい。それが無理でも、せめて僕と同じ境遇にある子供たちを解放する。

……この十年、僕が抱き続けてきた望み。

「……あかんよ、むつき。そんな怖い顔しちゃ……。あかん」「え？」

いつの間にか自分の考えに入り込んでいたらしい。

気が付くと、なな姉が悲しそうな顔で僕を見つめていた。

「アンタが今なに考えとるのか、わかる。……けどな、その顔は止めえ？ ウチ、アンタのその顔だけは、好かん……」

言われてはつとする。

今でこそ、なな姉の前でそんな顔することはなくなっていたが、出会ったばかりの頃はよく指摘されたものだ。

『ねー、キミ。また怖い顔してるよ。……なんか嫌やわあ。そーゆーの』

会う度に言われ、「ホラホラ、笑えー！」とほっぺをぐにぐにされたりしたので、そのうちなな姉といるときは極力自分の表情に気をつけるようになっていた。もっとも、それからしばらく経った頃には、そんなこと忘れてしまつくりずっと笑顔でいるようになったのだけど。

ちなみに、なな姉の言葉遣いが今と若干違うのは、この頃なな姉は基本的に標準語でしゃべっていたから。言葉の端々に関西弁を入れたりしていたが、今みたいな完全体(?)になったのは、むここの大学に通い始めた後のこと。帰省することにイントネーションや使う単語が変わっていくなな姉に、「本場で暮らすと語学力がアップするというのは本当だったんだ！」と、なんだか妙に感心したのを覚えている。

……そう言えばあの頃からかなあ。なな姉の持つ大きな二つの膨らみに、えもいわれぬ魅力を感じるようになったのは……。

「な、なんやねん？ 今度は急にヘラヘラ笑い出しよって……薄気味悪いわあ」

……なん……だと!?

僕がなな姉との思い出を回想して浮かべた、懐かしさのなかに親愛と感謝(と思春期特有のアレやコレ)一杯な愛らしい微笑を、やりにもよって薄気味悪いとは!?

「まあ、さっきよりは全然ましやけど？ アンタはそーやってアホみたいな顔しとる方がえーよ」

ア、アホみたいな顔……。

でもまーイイか、と僕は思う。今のなな姉は笑ってくれていた。「それにな？　むつきの気持ちもわかるけども、ウチとしてはアンタになるだけ普通の高校生らしゅう暮らして欲しいと思うんや。ウチはそのためにおるようなもんやし。……な？」

そう言いながらなな姉は僕の頭にぽんつと手をおいて髪をわしゃわしゃする。

三世院から指定され、今年から僕が通うことになっている高校は『陵桜学園』という日本有数のマンモス校。何の偶然か、なな姉はそこで世界史担当の教師をしているのだ。

その辺りの事情とその他もろもろの理由によって、なな姉は三世院から離れている間の僕の実質的な保護者ということになっている。保護者なので、それはもう当然のようにこれからこの同じ家で暮らしていくわけだ。

……うふふ。どんな嬉し恥ずかしハプニングが起こるのか、想像するだけで体から色んなモノが噴出しそうな気がするよ？

「ぬああ！？　むつき、アンタ何いきなり鼻血噴いとんねん！？」

うん、ホントに噴出してみたい。

「ぎゃあ！　あーもー服につきよったあ……」

「ほ、ほめんね、にやにやねえ？　らいりょうふ、ひっふにやらほっけにはひってるはら」

片手で鼻を押さえているせいで、おかしな発音になる。

「何言うつるのかわからんて！　しゃーない、とりあえず風呂入るついでに洗ってまうか……」

「そうだね！　じゃ、早く一緒に入ろうかつ！？」

「鼻にティッシュつめこんどるようなヤツとはよお入られません！　おとなしく待つとき」

そう言つと、なな姉は車に積んできたバッグの一つを持ってお風呂場へ行ってしまった。

バッグは他にもいくつかあって、これらはコンビニから帰ってき

たときに家の中に運び込んだものだ。

中には数日分の着替えや最低限の生活必需品などが適当にぶち込んである。

それ以外の荷物は明日以降、宅配便でここに届く予定になっていた。

「……よつ、と」

なな姉が行ってしまい手持ち無沙汰になった僕は、とりあえずさつきまでなな姉が寝ていた布団の上に横になる。

……い、いや、別にやましい気持ちは別に（少ししか）ない。横になるのに適当なものが他になかったから止むを得ないのだ、うん。
「……十年、かあ」

仰向けになつて天井を見ながら、僕は改めて自分が元の家に戻ってきたことの感慨に耽る。

約束があつたからなのかどうかは定かじゃないけれど、三世院はこの家を「元のまま」残してくれていた。

おまけに、なな姉があらかじめ掃除してくれていたおかげで長い間誰も住んでいなかったわりには綺麗なものだ。本当、なな姉にお世話になりっぱなしの僕。なんだか一生頭が上がりないような気がする。いつか恩返しをしなくちゃいけないな。……お嬢さん探しか。

ま、それはそれとして、家のこと。いくら掃除して綺麗になつていても、この十年の間に傷んでしまっているものもあるのだろう。ここの畳も良く見ればところどころ綻んだりしているし、押入れにしまつてあつた布団類も実はこれ以外は鼠に喰われたりしてちよつと使いものにならなそう。これだつてちよつとしけているから、ホントはちゃんと干した方がイイ。まだ僕は他の部屋を見てはいないけど、たぶん似たようなもののはずだ。

「朝になつたら家を見て回ろう。……リビングにキッチン、僕の部屋に……父さんと母さんの寝室……ふあああ」

……あー、なんだか眠くなつて来た。……このまま、寝ちゃおう

かな？ 鼻血も止まったみたいだし。

『ぎゃーーーーーーっ！？ な、なんやっちゅーねー
ーん！？』

と、僕がイイ感じにまどろんでいるところに、なな姉の絶叫が聞こえてきた。

続いてドダダダツと、こちらに戻って来るような足音も。

そして、「すわっ、何事っ！？」と慌てて布団から跳ね起き部屋から飛び出す直前、がらりと勝手にフスマが開いて飛び込んできた肌色の物体と僕は正面衝突した。

「うあっ！？ な、なな姉っ！？ ちょっ、この体勢はふぶはあっ！？」

「もー最悪やつ！ なんてお湯でーへんねんっ！？ むつき、アン
たちよつと湯沸機ボーラーの調子みてんか……って、なんや、まだ鼻血止ま
ってないんかい？」

鼻に詰めておいたティッシュが噴出す血液の勢いに負けてぼたりと落ちる。

これは近年まれに見る出血だ。……このままだと、命が危ない。
「ぐっ！ だ、だだ姉……お、おでがいだから、はやぐはなれでふ
ぐをきでください……」

両手で鼻を押さえつつ、僕はなな姉に懇願した。

なな姉の今の格好は、素肌に薄いタオル一枚巻いただけ。しかも
髪や肌が少し濡れてて色っぽい。

さらにぶつかった勢いで僕を押し倒し、腰の辺りにまたがるようにして座ってしまった。

本当はもっと、なにかこう色々見えそうなものとか伝わってくる
感触を詳しく描写したいのだけど、これ以上は年齢制限付きそうなので、無理。

……と、とにかく早くどいてっ！？

「なっ！？ コ、コラむつき、そんな暴れるんやないっ！？ ……
あっ！？」

「っ！！？」

気がつくと、朝だった。

夜の記憶はなな姉がお風呂に行ったところで途切れている。

もそもそ布団から這い出すと、バッグを枕にしてすやすや寝息をたてているなな姉が目に入った。

「……ん？」

鼻の奥に違和感を感じ、僕は急いで上を向く。

そうしていると違和感は治まった。

「ふー、やれやれ……」

僕は小さくため息をつき、なな姉を起こさないよう静かに窓へむかった。そして引かれたカーテンを開く。

「……ん……」

早朝らしい薄日が優しく目を刺激する。

窓も開け、思い切り伸びをした。

良い朝、だった。

——色々しがらみはあるけれど。

——今日から高校卒業までの、二年間。

——この家での暮らしはとても素敵なものになる。

この時、僕は春の薫りのする空気を目一杯肺に取り込みながら、そう確信していた。

そして、その確信は現実となる。

もちろん、全てが上手く行く、なんてことは、なかった。
失敗もしたし、失ったものだってある。

……それでも。

僕はこの二年間でかけがえのないものたちを見つけることができた。

そして、それらは僕の運命を間違いなく変えたのだ。

我知らず踏み込んだ漆黒の闇から、輝く陽光の下へと。

——蛇足。

この後の数日間、なな姉を見るとなぜか鼻血が出る、という症状が続いた。

不安になったので病院へ行こうとその旨をなな姉に告げると、不自然に目をそらされながら「そ、そんな必要あらんへんのちゃう？」と言われた。

カレンダーの月数が三から四に変わり、陵桜学園への初登校が近づく頃にはその症状も治まっていたが、実はそれ以来以前よりかなり鼻血が出やすい体質になってしまった。

ま、そんなわけで。

暗所恐怖症気味な上鼻血体質というあまり嬉しくない特性まで備えた僕の次の話は、学園登校初日、その登校風景から、始まるのである。

—— to be Continued ?

プロローグ（後書き）

おひさしぶりの方へ。

前作を放置したまま新しいものに手を出してしまい申し訳なく思います。

あちらも完全凍結にはせず、ネタがまとまればいずれまた再開したいと考えています。いつになるかはわかりませんが……。

そんな前科もあり、こちらもまた途中で行き詰まらなと断言することはできませんが、以前より更新ペースを落とし、その分少し考えてからの投稿で書ける限り続けて行きたいと思っていますので、もし可能なら今作も応援頂ければ幸いです。

作者：窪田誠

第一話 「パンと遅刻と曲がり角」

陵桜学園始業式当日。

ガッタンゴットン電車に揺られ、僕は学園最寄の糟日部駅へむかっていた。ちなみになな姉は先に車で出ている。別に一緒に行ってもよかったんだけど、ある目的のため僕は一人だ。

電車はほどなくして糟日部駅に到着。

そそくさと改札を出た僕は、素早く人目に付かない物陰に身を寄せた。

そして今朝、家からこっそり忍ばせてきたあるモノを鞆から取り出す。

焼き目がついた周りの部分はちよつとかたいけど、中の白い部分はふんわりやわらかな四角いパン。

……そう、食パンだ。

「うふふ……これさえあればっ!!」

そうして僕は独りほくそえみながら、そのパンをぱくんと口に咥えて走りだした。

もちろん、例のセリフも忘れてはいない。

「んーっ！ ひこくひこく（遅刻遅刻）ーっ!？」

そんな僕の姿をみて目を丸くするスーツ姿の人たちを何人も追い抜きつつ、僕が向かうはいざ、桜舞い散る陵桜学園。

そしてこの通学途中で起こるはずの、『運命の出会い』へっ!!
……である。

僕がこんな「奇行」に走ったのには理由がある。

それは、家に届いたなな姉の荷物の中にあつた何冊かの古い少女マンガ。

なな姉がまだ小学生くらいの頃に古本屋で手に入れたというのだから、相当な年代モノだ。

別に送るつもりもなく、なな姉自身持っていたことすら忘れていたのに、どーゆーわけか紛れ込んでいたらしい。

で。せっかくだからと僕はそれを読んでみた。なにが「せっかく」なのかと言えば、僕はこれまであまりマンガってモノに触れる機会がなかったから。

そして結果、大ハマリ。始業式のこの日まで、暇さえあれば何度も何度も読み返した。

物語の主人公は中学生。ちょっと勝気で男勝りに見えるけど、ホントはすごく優しく、勉強が苦手な運動が得意。そしてちょっとドジなところが可愛いロングヘアの女の子。

ストーリーはその娘と、転校生の男の子との恋愛話。お互い両想いなのはわかりきっているのに色んな理由ですれ違っただけで、読んでるこっちがじれじれして来る。でも最後は二人の気持ちが通じ合い、めでたしめでたし。

……うん。本当に、なんて素敵な物語なんだろう。今思い出すだけでも泣きそうだ。

なのに、それを読む度号泣する僕をみて、なな姉はなぜかいつも顔を引きつらせる。

もしかしたら、なな姉にはこの物語の素晴らしさがわからないのかも知れない。……なんてことだ。そんなだからモテないんだよね、なな姉ってば！

……つと。

まーちよつと話がずれたけれど、その物語の冒頭、女の子と男の子が出会う場面でもっとも印象的なのが、食パンを啜って走る姿と「遅刻遅刻ーっ！」というセリフ。

だから、僕はそれを実行してみているわけなのである。

だって、こうすれば必ずやあの二人のような『運命の出会い』が訪れるに違いないのだから！

なのに。

「お、おかしい……。な、なんで誰も曲がり角で僕にぶつかって来ないんだ……っ!？」

僕は焦っていた。駅前からずっと走り続け、気づけばもうすぐ陵桜学園についてしまう。

しかも、学園までの道筋に曲がり角は後一つだけ。もう目と鼻の先にある。数日前、学園の通学路を下見たとき、入念に数をチェックしておいたので誤りはないはずだ。おまけに啜っていたパンも「これはやっぱり、ただ啜えてるんじゃないかって、食べるためだね？」と、リアリティーを追求し、走りながらむぐむぐ食べたため実はもう四分の一程度しか残っていない。そのままだと食べつくしてしまいそうだったので途中からはやむなく手に持ち、曲がり角の度、啜え直していた。

……しかし、これはマズい。

僕は走る速度を落として頭を巡らせる。

（ど、どうしよう。いくらパンを啜えて走っていても、曲がり角がなくなっちゃったら意味がないのに……。なにせ、走って来た主人公は曲がり角でぶつかって『運命の人』と出会ったんだから。そう、そしてその時、主人公の女の子が落とした食パンを男の子が……! ?）

そこまで考えた時、僕は自分が痛恨のミスを犯したことに気づき、愕然とした。

（そうだ！ パンを啜えているのは女の子の方じゃないかっ! ?）
背景は暗転してイナズマがドーンっ！

あまりに衝撃的な事実には僕は思わず足を止め、曲がり角が目に入っていたので無意識に啜えかけていたパンを口元からぼろりと落とす。

そうだったのだ。やはりどこもおかしいと思った。

パンを啜えているのは女の子。そして、実際「転校生の男の子」的立場である僕が、その女の子に曲がり角でぶつからなくてはいけなかったのだ！

「……あ、あああ」

なんだか急に気が抜けてしまった。

僕は落としたパンを力無く拾い、今度は走ることなくとぼとぼ歩き始める。

曲がり角は目前だけど、別にもういい。

残念ながら、『運命の出会い』は僕のまぬけな勘違いのせいで灰燼^{じん}に帰してしまった。

それに今こうして少し冷静になった頭で考えてみれば、いくら遅刻しそうだとしても本当にパンを啜えて走るような女の子はいないんじゃないだろうか？ って気にもなってくる。

そして万が一いたとしても、その子と曲がり角でぶつかる確率なんてそれこそ万が一……いや、兆が一にもないだろう。

やはり物語は物語でしかないのかも知れない。

「……そもそも、『運命の出会い』なんてそうそうあるようなものじゃないよね」

と、僕が負け惜しみにも似た独り言をつぶやきつつ、最後の曲がり角にさしかかった時。

「んーっ！ ひ、ひこくひこっんぶへっ！？」

変にくぐもった声が聞こえるとともに、僕のみぞおちを激痛が襲った。

「ごふっ！！？ げ、げぼげぼっ！ な、なんだ！？ 今の衝撃はっ」

よくわからなかったけど、なにかが僕のわき腹にぶつかったらしい。

僕は慌ててまわりを確認する。もしかしたら三世院の刺客が僕を狙っているのかも知れないと思ったからだ。

でもさしあたり、僕の視界に怪しいモノはなにも映らなかった。
だいたい、今の僕を三世院が狙う理由も特にないわけで、おまけに
当たった感触からしてそう硬いものでもない気がする。でもだとす
ればいつたい今のは……。

そんな風に頭をぐるぐる回転させている僕の耳に、どこからか突
然女の子のもらしい声が届いた。

「あ、あいたた。やー、しまったしまった……」

「むっ！？ 誰だっ！？ ど、どこにいるっ！？」

ちっ、声はすれども姿は見えない。

「まさか！ これが噂に聞く三世院暗部『如月』^{（おきづき）}っ！？」

「……いや、何だか知らないけどそのヒト、下だよ。フツーに、
キミの下」

「……へ？」

聞こえてきた声に素直に従い自分の足元を見ると、小学生くらい
の女の子がぺたんとしりもちをついたような格好で倒れていた。

どうやら、ぶつかってきたのはこの子みたいだ。体格差があるか
ら僕は平気だったけど、当たった反動で小柄なこの子は倒れてしま
ったんだろう。

その拍子にめくれたのか、元々短めらしいスカートからやけに白
いふとももがほとんどのぞいてしまっている。

……なんだろう、この感じ。なにかすごくイケナイモノを見てい
るような……って、い、いや、今はそんなことを考えている場合じ
やなかった。

「ご、ごめんね。大丈夫？」

「うん、へーきへーき。こっちこそぶつかっちゃって……おおっ！
？ や、悪いネ、手をかりちゃってさ……っ」と

急いで女の子に手を伸ばすと、その子は一瞬驚いたような顔をし
た後、すぐ手を取って思ったより素早く立ち上がった。

さっきみたいにしりもちをついていると、地面についてしまうく
らい長い髪が重そうで、あまりそうは見えないけど案外身軽なのか

も知れない。まあ、この年頃の子は男子に比べて背も高いし力や運動神経も上な傾向があるから、それほど驚くことでもないけれど。「フー、やれやれ。まさかこの私がいかにマングアみたいなシチュに出くわすなんて思わなかったよ……」

スカートについた汚れを払いながら女の子が小声でそんなことを言うのが聞こえた。

その中に、非常に興味がある単語があつたのをもちろんこの僕が聞き逃すはずはない。

僕はおそろおそろ、その子にたずねてみた。

「ね、ねえ？　そ、その『マンガ』みたいな……シチュ？　つていたいというのかな？」

「ん？　アリア、聞こえてた？　別に大した意味はないんだけどネ？　たださ、こうパンを啜えて走っているときに知らない男の子にぶつかって、しかも手を取ってもらうなんて……まんま少女マンガの世界じゃんっ！　……まー、内容的に一昔前のモノだし、今じゃギャグにしかない都市伝説みたいな話だけど」

……なんつたる、こと……っ！

女の子の発言から受けたショックで後半は耳に入らなかったけど、それじゃもしかしてこの子が……この小学生の女の子が僕の、『運命の人』だつてことなのですかっ！？　お願いです、何か言ってください高橋みつる大先生（例の少女マンガの作者様。僕の神）っ！？　「ど、どしたの？　急にそんな絶望に打ちひしがれたような顔……アレ、それでもないのかな？　なんて言うか『それも、アリ？』みたいな顔して？」

……今、僕はいったいどんな顔をしてるんだろう。

「まあいいやー。それより、ううう、私の大事な朝食が……」

そう言つて女の子はぶつかったときに落としたらしいパンを拾いあげ、名残惜しそうに見つめた。

そのパンは。

「……コロネ？」

「うん。コロネ。チョココロネ。甘くて美味しいチョココロネっ！みんな大好きチョココロネっ！！でももう食べれないチョココロネ……」

そしてだばーっと涙を流すチョココロネ……ち、違った、女の子。僕が悪いつてわけでもないけれど、なんだか申し訳ない気がする。……ところでこれは、どうなんだろう？確かにパンだけど、食パンじゃなかった。

……。
……。
……。

……よし、今日のところは、潔くあきらめよう！さすがに、こんな小さな子とお付き合えることはできないしねっ！葛藤時間がやけに長かったのは、気のせいだきつと！

「あの、良かったらこれ食べる？食べかけだけど」
気持ちを切り替え、僕は自分の食パンをそつと女の子に差し出しながら優しく言った。気分はさながら英国紳士。僕は少女のあしながおじさん。

するとその子は少しはにかみ、食パンをじいつと見つめてのたまった。

「うっん、いいよ。気持ちだけで。それ、なんだか汚れてるし、気のせいかぐんにやりしてるし。……よだれ？」

う、うえぶすたーっ！？

……ああ、認めよう。今のこの子の顔ははにかみじゃなくて引きつりだ。最近、なな姉で見慣れているから見まごうはずもない。おまけに最後のセリフまでいつか聞いたなな姉のものとかがぶっていた。……って、ああっ！？」

女の子の大声に、自己嫌悪と言う名の哀愁に浸りかけていた僕ははっと我に返る。

「な、なに！？」

「そーだ！私、いまこんなところで話し込んでる場合じゃないん

だった！　ち、遅刻するっ！？」

そう言われ、僕も気づいた。

……………ヤバイっ！

編入初日、しかも始業日から遅刻なんてしたら、今後の学園生活に間違いなく支障を来たす！

「ごめんっ！　悪いけど、僕もう行くよっ！？」

「えっ！？　ち、ちよっと待って！　わ、私も！」

あせって駆け出した僕の後ろに、なぜか女の子もついてくる。

だから僕は慌てて注意した。

「だ、ダメだよっ！？　僕はこれから行くのは陵桜学園……高校なんだ！　キミはほら、早く小学校へ行かなくちゃ！！」

「……………あべしっ！？」

……………え？　な、なんでこんなタイミングで転ぶんだこの子は！？　しかも走りながら前のめりなんて危険すぎる！

「へ、平気っ！？」

「い、痛ったー……………もー、キミがおかしなこと言うから本気でコケちゃったじゃん」

女の子に駆け寄り声をかけた僕に、体を起こしたその子是不機嫌な表情を浮かべてそう言った。

……………なんだ？　僕何か変なこと言ったっけ？

「その顔……………まさか、ホントに私を小学生だと思ってたの？　そりゃないよー、ちゃんと制服着てるのに。まあ見た目がアレだっていうのは認めるけどさー」

なるほど。

良く見れば、確かに彼女が着ているのは陵桜学園の制服だった。

……………いや、できれば僕をあまりせめないで欲しい。

自分で着ている男子制服ならまだしも、僕が女子の制服をみたのはパンフレットと……………酔っ払ったなな姉が勢いで着たのを見たことがあるだけだったし（ちなみに、なぜ持っていたのかは不明。怖くて聞けるはずもない）、なにより彼女の容姿は高校生にしてはどー

したって幼すぎた。今だって、理性では彼女は高校生なんだと認めているけれど、本能は「この子は小学生だぜ、うへへ」とやけに下卑た言葉で脳幹を揺らしている。

改めて彼女の外見を説明すると、まず長い髪は青色で、頭のとっぺんにアンテナみたいな毛が一本（一束？）たっている。手入れをしてないわけではないんだろうけど、それほど気を遣ってもいなさそう。

そして背が、きわめて低い。ごくごく人並みな僕の背丈のお腹の辺りくらいまでしかなく、それで僕のみぞおちにダメージを与えたのかと納得だ。単純に考えて、彼女が幼く見えるのはこの身長のせいが大きいだろう。

あとはスタイルが全体的に、こう、身長に合わせたサイズでありそうなことも、一因じゃないかなー、と思う。

……ごく。そうか、もしかしてこれが、世にいう「幼児体型」というものなのか！？ 初めて見た！！

「なんだかさー、すつごく失礼なこと、考えてない？」

「……………。さあ急ごう。学園はもうすぐだ！」

「誤魔化すの下手だネー、キミ。けど、確かに急いだ方がっ痛っ！？」

苦笑いした彼女は立ち上がりかけ、そのとたん顔を歪めた。

「ア、アハハハ……。ちよつと足ひねっちゃったみたい」

そうしてまたへにやつと座りこんでしまう。

……うん。これはもう仕方ない。

「あーあ、ついてないなあ。始業式に遅刻なんて、またななこ先生にどやされるよー……って、わ、わわっ！？ キ、キミ、なにすんのっ！？」

「え？ 抱っこ。……あ、『お姫様抱っこ』。そして……ダーツシユッー！」

動けなくなつた彼女を両腕にかかえ、僕は猛然と走り出した。いざ、鎌倉っ！？

「だ、ダメだつて！？ 私なんか持ってたらキミも遅刻しちゃうつ！？」 お、置いてつていいからさー！」

何事か叫びながら腕の中で彼女が暴れる。少し走り難いけど、見た目通り彼女は軽いし、力もそんなに強くないからなんの問題もない。

「大丈夫大丈夫っ！ 僕、意外と足速いからっ！ もーちよい飛ばすんで、しっかりつかまっててよっ！」

「う、うそお！？ もう充分速いっつ……ア、アスファルトっ、削れてるっつっ！？ ……………に、にゃー……」

うーん、疾走すると春風を体全体で感じる！！ 舞い散る桜に浪漫の嵐！？

妙な雄たけび（……雌たけび？）を上げてから彼女はおとなしいし、腕に感じる微妙な重みも不思議と心地いい。

これなら、三世院で変な力タチをした石柱を体に括り付けて山中を駆けずりまわされた忌まわしい記憶も帳消しにできそうだった！

「うふ、うふ。……わははははははーっ！？」

その後、なんだかハイな気分になった僕は大笑いしながら爆走。調子に乗っていたら校門を見逃してそこを二百メートルくらい過ぎたところで慌てて戻るといってお茶目をやりつつも、無事、遅れることなく僕たちは陵桜学園へと到着することができたのだった。

「『無事』じゃないよっ！ もーっ！」

「ご、ごめんっ。反省してます……」

今、僕は真っ白なベッドの上に体を起こした彼女に猛然と、怒られている。

校門に到着した時、なんとなーく違和感を感じてふと腕の中の彼

女を見ると、みごとに目を回していた。

（や、やば……）

ぐったりした彼女が苦しくないよう抱え直し、とりあえず適当な入り口から校舎へ入った僕はそこで途方にくれてしまった。

保健室に行こうと思ったのだけど……場所がわからない。しかも校舎はやけに広くてヘタに動くと迷いそうだ。人に聞こうにも、時間ぎりぎりなせいか他の生徒は辺りに誰もおらず、後から来る様子もなかった。もしかしたら、もうみんな始業式の会場へ移動してしまっていたのかも知れない。

（ど、どうしよう……）

行き詰まった僕はその場をしばらくうろつろつたり来たり。

とにかく自力で探してみようと決心して、迷子防止の目印を近くの壁につけておくため片足を大きく後ろに振ったところで、真横から声をかけられた。

声をかけてくれたのはこの学園の養護教諭だという黒髪が素敵な若い女の先生で、その人につれられて僕はようやく保健室へ行き着くことができたというわけだ。

……はあ。それにしても、さっきの先生、やっぱりすごく綺麗だったなあ。

歳はなな姉と同じくらいに見えたけど、おしとやかで優しそうで……はあ……。

「……だからさ、私も学園まで連れてきてもらったことは感謝してるんだけどネ、って……。ねーキミ、ちゃんと聞いてるー？」

「……うんうん」

「となりの家に、^{かこ}囲いができたんだって」

「……うんうん」

「で。その囲いがなんと！ すっごい、カッコイイんだって！！」

「……うんうん」

「私、あんまりこんなことしたくないんだけど、キミを叩いてもイ

イかな？」

「……うんうべらっ!？」

下顎から後頭部にかけて突き抜けるような衝撃。

文字通り「目の覚める」一撃で僕は我に返った。どうやら彼女の掌底らしい。

いけない、いけない。彼女のお叱りを謹んで受けていたところだったのに、ついつい関係ないことを考えてしまっていた。

「ご、ごめんごめん。ちゃんと話を聞くよ。……えーと、それでその、柿をたくさん食べたとなりのお客さんはどうなったの？」

「……も、もういいや。一応『となり』って言うのは耳に入ってたんだね。それ以外は何かも間違ってるけど」

打たれた箇所をさすりさすり話を聞き返そうとした僕に、彼女はズーンと疲れたような顔で言った。

保健室についてベッドに寝かせると、彼女はわりと早い段階で目を覚ましていた。

さすがにしばらくぼーっとしていて、捻挫の治療はその間に先生が済ませてくれている。そしてなぜかお互い大事に保管していた食パンとコロネもここで処分。

この頃にはもう始業式が始まる時間になっていて、先生は式で保険関連の話をしなければなららしく、彼女を気にしつつも会場へむかった。

で、その必要がない僕はそのままここに残り、先生が用意してくれたパイプ椅子に腰掛けて彼女の様子をみていることにしたのだ。

そう、実は僕、もともと始業式に出る予定はない。学園に着いたらまずなな姉のところに行って、式の間は職員室で待っている手筈てはずになっていた。今日が編入初日で所属クラスの無い僕には、式中の所在がないからだ。他の生徒と離れた場所や教師陣のなかに混じって式に出るという案もあるにはあったんだけど、「悪目立ちするかもやし、別にそこまでして出る必要あらへんでー」というなな姉の

意見を受け入れた形。

とはいえ、本来ならもうとくに職員室に行っていないといけないのに変わりなく、後でなな姉に怒られるのは必至である。だから急いでいたものの、こんな状況な以上、彼女一人を残して行くことはできなかった。

そしてその後、意識がはつきりした彼女は僕に喰ってかかってきたというわけだ。

でもどうやらそれも終わりらしい。

だから、僕は最後にもう一度謝る。

「本当にごめん。つい調子に乗っちゃって……」

彼女が目を回したのは言うまでもなく僕が彼女を抱えて無茶苦茶に走ってしまったからだ。

いくら急いでいたとしても、もつと彼女のことを考えておくべきだった。

三世院で幼い頃から「勉強」と称して色々やらされてきた僕は、おそらく普通の高校生男子より頑丈かつ身体能力的が高い。それでもこつちに越してきてからは意識・無意識両面で気が抜けている状態なので普段はそうでもないと思うのだけど、なにかのきっかけでテンションが上がったりするとさっきみたいに暴走しちゃう。道路のアスファルトを削り取るような脚力その他など日常生活にはまったく必要無く、むしろ邪魔にさえなる力なので「無駄パワー」だ。

……本当に、気をつけないと。

今回はまだ目を回すくらいで済んだから冗談めかしてはいるものの、もし、自分のせいで誰かに致命的な怪我でも負わせてしまったら、もう僕は……。

「あ、あー。いやそのネ？ もーイイんだよ？ もう別に怒ってないし……だから……だから、やめてよー！？ もー私も謝るからさーっ！ ……ごめん！ ほら、謝ったよっ！？ だからやめてよー！ もーヤダよー！？ やだやだやだーっ！？」

「……え、えーと？」

な、なんだこれ？ どうしたんだ彼女はっ！？

突然駄々っ子みたくなってしまった彼女にビビり、僕の中のシリ阿斯分がどっかに引っ込んだ。

それは別にぜんぜん構わないんだけど、この状況はどうだろう？

学園の保健室。

ベッドの上で「やめてよ！？」「やだやだ！」と取り乱して叫ぶ、とても幼い外見の女の子。
僕。

（社会的に殺されるっ！？）

これはこの前な姉に号泣された時と同じ……いや、それ以上のピンチだ。

ベッドは白い布で周りから目隠しされているけれど、こんな大きな声を出されたら部屋の外からでも聞こえてしまうだろう。

式中体調が悪くなった生徒がいつ来るかも知れないし、話を終えた先生が戻って来る可能性だってある。

もしそうなったら張られるレッテルは「極悪」から「変態」にレベルアップな上、前回と違って原因がわからないため対処のしようもない。……うつつ、進退、ここにきわまれりっ！？

「……ああ、人生とは何故にこうも無常であるのだろうか？ 『人生』、それは『人』が『生』きると書く。つまり、生きるということそのことがすでに無常なのだ。そうであれば、いかなる理由によって人は生きるのだろうか？ 否、ここは『理由』でなしに『意味』とすべきか。人が生きる意味とはなんだ？ 僕が生き……そして彼女が生きているその意味とわっ！？」

「そんなのマンガやアニメ、それとゲームに決まってるじゃん！」

「そ、そーだったのかあっ!? 生きるとは、人生とはマンガやアニメやゲーム……は?」

「なんとなく、思ってたけどさー。キミやっぱり面白いヒトだネ」
二ヨ二ヨ。

なぜかそんなちよつと変わった擬音が聞こえる笑顔で彼女が笑っていた。

どうやらもう素に戻っているようだ。

「えと、い、いつから?」

「ん? キミが『……え、えーと?』とか言ってたあたりかな?」
それ直後だよ!? 『やだやだやだーっ!?』の次の瞬間もう普通だったってことなのかっ!?

……ヤバイ! 今気づいた! 彼女、変だ!

「それにしてもすごいよかったよー。キミの百面相。やはー、たんのーしたー!」

変態だっ!?

「やっぱさー、キミは変な顔してるほうがイイねー。あんな暗い顔よりもさー」

そう言つと、彼女は少し真面目な表情になった。

……ああ、そっか。彼女が「ヤダ」と言つてたのは、僕の沈んだ顔のことだったんだ。

それとこれも今気づいたんだけど、この娘こな姉にどこか似ている。もちろん見た目はいつそ清々しいくらい違うんだけど（どのあたりが、とは言わない。あえて）、なんていうか身に纏まとう空気みたいなものが。

にしても、いささか反応が過剰だった気はするね?

「私、ネ。ダメなんだー、人が沈んだり暗かったりするの。相手が良く知ってる人だったら茶化したりして誤魔化すんだけど、キミとはさつき知り合ったばかりじゃん? どーしていいか、わかんなくなっちゃってさー……」

と、言うことらしい。

……ほふゝん？

「な、なんだよー？ この私がこんな真面目なこと言うのは珍しいんだよ？ 貴重なんだよ？ なのに……なんでそんなニヤニヤしてるのさー！？」

「うん。キミって良い人なんだなーって思ってた」

「なっ！？」

僕が思ったことを口にすると、彼女は顔を紅くして硬直してしまっ

った。
「……も、もー。言われ慣れないこと言われたから、ちょっとビツクリしちゃったよっ」

ほどなくして硬直が解けた彼女はおどけたように言っけど、まだ少し頬が染まっている。

そんな彼女を見て、僕は純粋に、可愛いと思った。

「まったく、なんかさー私の調子狂わせるよね、キミ……あ」

「なに？」

「鼻血出てる」

「そんなバカなっ！？」

慌てて鼻に手をやるとぬめりとした感触が指に伝わってきた。

おかしい。

僕の純粋な気持ちは一体どうしてしまったんだ。

「……ふがふが」

「うっわー。やっぱりすごいネ、色んな意味で」

両穴からどくどく噴出す若き血潮を丸めたティッシュで強引に堰^せき止める。

そんなナイスガイな僕に彼女は例の「ニヨニヨ」を贈ってくれた。ハハハ、どうしよう。……心が折れそうだ。

あれ？ だけど、とりあえず鼻血は止まったみたい。

ふっ、さては心に負った傷に体中の血液が集中してるに違いないっ！ ……なんてね。まさかそんなこと、あるはずもない。……ない、よね？ そんな人体の神秘を僕が体現しているなんてこと。

「さてつと。んー、もうそろそろ始業式も終わる頃だよー。私そろそろ教室に行つとこうかなー？」

自分の体に起きたかもしれない不条理に僕が軽く混乱していることなど知る由もない（むしろ知られていたら非常に困る）彼女は、ぐーっと一度伸びをするとそう言った。

「え？ 足はもう大丈夫なの？」

血染めのティッシュを新しいのに包んでゴミ箱にポイっ！ そのついでにさっきの思考もポイした僕は彼女にたずねる。

「あー、まだちょっと痛むけど、平気だよ。……ほらっ！」

笑いながらベッドの上に立ち上がると、彼女はぴょんぴょん跳ねてみせた。

その姿はまるでトランポリンで遊ぶ元気な児童のようだ。

実際、彼女の怪我はそれほど酷くないようで、手当てもシップとテーピングで簡単に固定しただけだったから、あまり無理をしなれば問題無いのかもしれない。

とは言え、まだ一人で歩かせるのは心配だよし。

「じゃあ、一緒に行こうか。また抱っこ……」

「イ、イイヨッ！？ サツキノデモウコリゴリダヨッ！？」

「……肩を貸すよ」

「それなら……無理、届かない」

「じゃ、じゃー腰につかまって」

「なんか恥ずかしいからヤダ」

「首輪とハーネス……」

「もつとヤー」

……グダグダだ。

数秒前の「よし」は何だったんだ、僕よ。

しかしここまできて、いまさら引き下がるのは男が廃るってモノ。最後は男らしく、ビシッと決めよう。

「な、ならせめて教室まで手を引かせてください……」

土下座。

「な、何がキミをそこまでさせてるの？ でもま、それならおっけーかな」

うんヨシ完璧。

やっぱり、男は土下座だよ。

そうして彼女の手を引き保健室を出て十数分後、実は二年生だという彼女（僕は完全に新入生……年下だと思い込んでいた）のナビにしたがって二年の教室がずらーっと並ぶ廊下までやって来た。ここが僕たちのとりあえずの目的地。教室にはまだ入らない、というか入れない。なぜなら彼女がどのクラスかわからないからだ。

……『クラス割を確認する』という、実に基本的な作業をしていないことにお互い気づいたのがついさっきなのだから仕方ない。

僕は一人で戻って確認しようと思ったんだけど、彼女が「ま、私にも一応友達がいるからさ。その娘たちが私のクラスもみてくれるだろうし、この辺りにいれば気づくじゃん？ そーしたら聞けばいいよ。……メンドイし」と言ったので、今僕たちはお互い窓側の壁に背中をあずけ、二人並んでマヌケに突っ立っている。

予定だと式も終わっているはずの時間だったけど、長引いているのかまだ人が来る気配はなかった。

「ふー、それにしても思ったより時間がかっちゃったネ」

そう言っただけで彼女がひたいに薄っすら浮いた汗を右手で拭く。

今日の気温は平年並みだと朝の天気予報で言っていたから、普通ならこんなに汗をかいたりしないんだろうけど。

「やっぱり今からでも……足、辛いでしょ？」

「もー。へーきだって。……でも、ちょこつと疲れたヨ。たはは……」

歩き始めて最初のうちは普通に見えた彼女も進むにしたがって明

らかに表情が曇ってきていた。

歩調はゆっくりだったとはいえ、怪我した足を庇いながらなのだから無理もない。

……こんなことなら負担の大きい階段だけでも強引に抱き上げてしまえば良かった。

そんな風に僕が後悔していると、ふいに彼女が話しかけてきた。

「ねー、すっごい今更なんだけどさー。……私たちってまだお互い名前も知らないんだよね？」

「……あ」

そう言われるとその通りだ。出会いが出会いだったし、その後もドタバタしてたせいですっかり名乗るのも聞くのも忘れていた。……それでどーやって僕は彼女のクラスを確認するつもりだったんだろ。機会があればそう思っていたちよつと前の自分には非聞いてみたい。

「……んふふつ。なんかヘンだよな」

それは僕のことか、名も知らぬ少女Aよ。

「そーじゃなくて。名前も知らないヒト同士で、こうやってバカみたいに一緒に立ってる私たちがさー。始業式もサボっちゃってるし、しかもホラ、こーんな……うりゃっ」

「ぎっ！？ い、いきなり強く握らないでよっ！ さすがに痛いっ！？」

「ハッハッハー。……って感じで仲良く手までつないじゃってるんだよ？ なんだかおもしろいと思わない？」

言い終わると彼女は僕を見上げて首をななめにくいつと曲げた。どうやら同意を求めているらしい。ちなみに手は、保健室から手を引いてきたときから、なんとなくつないだままになっていたものだ。

でも僕はそれには何も答えを返さず、黙って彼女とつないだ自分の右手に軽く力を込めたり抜いたりするのを繰り返してみた。

にぎにぎ……あー、やわっこい。

「ち、ちよつとっ!？」

「さっきの仕返し。どう？」

「どう、って……バカ。ヘンタイ。もげちゃえ」

な、なにが？ 彼女の最後の言葉に冷や汗が背筋を伝う。

おまけにそつぽを向かれてしまった。

オーケー。

……やりすぎた。

「ご、ごめん。もう手は離すから……」

僕は彼女の後頭部にそう声をかけ、右手の力を完全に抜く。すると僕の手は彼女の手のひらからすつと離れ……ない？

「あ、あの？」

「……いいよ。離さなくても」

表情の見えない彼女からそんなお声がかかった。

そして右手には彼女が僕の手をきゅつと握る確かな感触。

そのとたん、全身の汗腺が僕に非常事態を告げ始める。

『こちら、汗腺一号！ 汗が止まりませんっ!』

『こちら汗腺三六号！ 同様でありますっ!』

『こちら一九七八飛んで一号、汗が、汗があ!？』

……………。

すまない、僕の汗腺たち。

正直手のほどこしようなない。

確かにさっきまで普通に何の気なしに手をつないでいたはずだった。

それがどうしたことが、今の彼女の言動によって見事に僕は意識させられてしまったのだ。

自分が、一人の男として彼女と手をつないでいるということ。

……おかしい。僕の好みは、どちらかといえばもっと年上のおねーさんのはずなのに。

なぜこんな、こんなっ……倫理的にいろいろ許されないような見た目の娘にっ!?

「……………」(どっばどっばっ!)

「……………」(しーん)

お互い黙っているけど、どちらが僕で彼女なのかは()のなかでわかってもらええると思う。

しかしそれにしても、あんなことを言っただ彼女の真意がわからない。

いまだ彼女はそっぽをむいて、でも僕の手だけはしっかり握っていた。

……まさか、とは思っけど。

(もしかして、彼女もまた僕に対して……)

——ざわざわ、ざわざわ。

と。

僕の胸になにやら淡い期待がむくむくと湧き上がってきたのと同じ時、まるで見計らっていたかのようなタイミングで、僕たちが立っている場所のすぐ近くの階段からたくさんの人間が登ってくる気配を感じた。

どうやら式を終えた生徒たちが戻ってきたようだ。

それに気づいたのは僕だけじゃなかったらしく、いつの間にか彼女も視線を階段へむけていた。

ほどなく、その階段を先陣切って登ってくる一人の女子生徒が僕の視界に入った。

紫色の髪を両耳の上あたりで結んだおさがが二つあるその娘は、何か嫌なことがあったみたいに大きな目をいからせながら一人でズンズン登ってきていた。顔立ちの整った綺麗な子なのに、なぜか鬼も泣かしそうなオーラを発しているせいで正視するのが困難だ。……だって、すごく怖いんだもん。

しかしその鬼娘おにむすめが階段を上がりきったところで、突然僕の横の彼女が大声をあげた。

「かがみっ！」

その声にビクツと二本のおさげを揺らした鬼娘が僕たちを見る。

そして鬼娘は元の怒りに困惑の表情をプラスした、なんとも複雑な顔でこちらに近づいて来た。

「こなた！ アンタ式にも出ないでなにしてんのよっ！？ 心配したじゃない！」

「う、うつわ！ ご、ゴメンってばかがみい……」

知り合いらしい鬼娘に挨拶抜きで怒鳴られた彼女が顔を青くして謝った。ついでに僕の顔からも血の気が引く。……怖い、とても怖い。

「……と、ところで？ こなた、この男の子は何なわけ？ 式をさぼって一緒にいて、おまけにそんな手っ、手までつないじゃってるなんて？」

怒りのためか顔を赤くした鬼娘は、顔は彼女の方にむけたままちらつと目だけで僕を見てそう言った。

（ふんふん。会話から察するにこの小さい彼女の名前は『こなた』、鬼娘は『かがみ』というらしい。さあて、『こなた』は『かがみ』に僕の何を何て説明するのかな？ うふふ）

心臓が縮みあがりそんな恐怖の存在に睨まれた（と思った）僕は現実逃避からそんなことを考える。

とはいえ、『こなた』がなんて言うのかは実際かなり気になるところではあった。

「そ、それはネ？」

『かがみ』に怯えつつも、僕は『こなた』の発言に耳をしっかりと傾ける。

……ときどき。

「この男の子はネ。……私を小学生だと思って無理矢理抱き上げたあげく気を失わせて保健室に連れ込んで鼻血を出して、さらにここ

までずっと手を離さず途中ちょっといやらしく触ったりしてくれた、
名前も知らないヒトだよっ!」

……うん。……そうだね。

……でもさ。……その説明は、くない?

……あ、そっか。

……手、離さなかったのは、この説明に信憑性を持たせるためだったんだね?

……なるほど。

は、ハメられたつつつつ!!?

「たすけてかがみーん」

し、しかもわざとらしくなんてこと言いってくれてんだこの娘っ
!?

「アンタっ!! 今すぐこなたから離れなさいっ!? このヘンタ
イっ!?!」

ぐさあっ!!

『かがみ』の罵りが僕の胸に突き刺さる。

ま、まずい、危惧していた事態が現実に!?

「ち、ちよっと待ってっ!? 僕の話も聞いて鬼……かがみさんっ
!?!」

一瞬『鬼娘』と言いかけて修正。あ、あぶなかつ……。

「だっ、誰が『鬼かがみ』よっ!? ……あー、もうムリだわー、
コイツを無傷で済ませるの」

最悪だ。いやもう「鬼」とか言ってた時点でアウト。……バカ、
僕のバカ!

「こなた! 早くこっちへ!」

「ホーイ。……んふふ」

そうこうしているうちに、手を離して僕の隣から『かがみ』の後
ろにひよこひよこ移動する『こなた』。

その顔はにまにまーっと、とても楽しそうに見える。

……ち、ちくしょう！　なんだよ、人の不幸がそんなに面白いのかキミわっ！？

「やつちやえ、かがみっ！」

「言われるっ、までもっ！！」

『こなた』の声援を受けた『かがみ』が、すつとわずかに腰を落とす。

そして次の瞬間。

「……アプチャ・プシギ！」

ばひゅっという空気を切る音とともに、弾丸のような前蹴りが飛んできた。

「どっうえーっいつ！？」

僕はそれを寸で横にかわす。情けない声が出てしまったがご愛嬌だ。

「……く、外したっ！？　っなら！」

僕の後ろにあった壁の、紙一枚直前で蹴りを止めた『かがみ』がきゅきゅっと軸足で回転し、再び攻撃の姿勢を整える。

「トルリヨ・チャギ！」

「う、うわーんっ！？」

今度は見事に回転の勢いがついた廻し蹴り。

僕はそれもしゃがんでかわす。半泣きだけど気にしちやいけない。

……そ、それにしてもこれはマズイ。

……対処しなければっ！

（この作品はゆるりまたゆるり四コマ『らきすた』のファンフィクションです。今、主人公を蹴りまわそうとしているのは、かのツンデレツインテール「柊かがみ」その人ですが、二次創作的脚色により彼女はテコンドー使いとなっております。その辺りをご了承承の上、引き続きお読みください。作者より）

……よしっ！

「なにぶつぶつ言ってるのっ！？ ……ネリヨ・チャギ！」
「そ、そんなっ！？」

僕の危機的状况は何一つ変わっていないっ！？

「だっ、だはー！っ！？」

しゃがみ込んだ僕の頭上に降ってきた踵かかとから惨めに這いずって逃げる。

しかし、僕もこのままでは終われない。

雄々しく立ち上がり、『かがみ』にむかって叫んだ。

「ひ、ひっぐ、ひっぐ！ さ、さあどうした、ひっぐ！ キ、キミの力はっ、うっく、そんなものなのかっ！？ ひっぐ！」

いいだろう。

そうさ、僕はもう泣いている。

マジ泣きですが、それがどーしたっ！？

「うっ！？ ま、まだまだ私の実力はこんなものじゃないんだから……って言っても、なんか全然当たる気しないし……おまけにこのヒト本気で泣いてるみたいだし……ど、どうしよう、こなたっ！？」

僕の気迫に飲まれた（ってことでどうか一つ）『かがみ』はつり上がっていた眉をハの字にして『こなた』に呼びかけた。

すると呼びかけられた『こなた』は一瞬何か思案するような顔になり、続いて何かいたずらを思いついた子供みtainな表情をして、言った。

「やーい、かがみのいぢめっこー。泣ーかした♪ 泣ーかした♪」

………はっ？

いきなり手のひらを返して『かがみ』を睨し立て始めた『こなた』に僕は呆然とし、涙も止まる。

「こ、こなたっ！っ！？」

しかし僕より驚いたのは『かがみ』だったらしい。

「……………。ア、アンタもしかして今の話、全部ウソかっ！？」

いや、ホント……。

「さー？ どーでしょー？」

なのに、『こなた』はニマニマ笑って、まるで『かがみ』を挑発するかのよう。

……………。

だ、ダメだつ！ 逃げてっ！？ キミみたいな小柄でしかも片足を負傷してる人間に、『かがみ』は相手がつとまる使い手じゃないよっ！？

「だあああつ！ もーエイプリルフルは過ぎてんのよっ！？ ……ティミヨ・アップチャ・プシギ！ ティミヨ・ヨプチャ・チルギ！ ……ティミヨ・トルリヨ・チャギ！！！」

「んふー。むふー。おひょー。……………もー、ダメだヨ、かがみー？ そんなに跳ねたらみえちゃうよー？」

くっ……………僕の角度からじゃ、見えなかった……………っ！！
……………で、ではなく。

『かがみ』の飛び前蹴り、飛び横蹴り、飛び廻し蹴りの三段攻撃を『こなた』はひらりひらりと最小限の動きでかわしきった。

な、何者なんだこの娘たち？ 『かがみ』の蹴りの鋭さといい、彼女の身のこなしといい、三世院にもこれほどの動きが出来る人間はそういなかった。

……………まさかこの学園にはこんな生徒たちがわんさかいたりするんじゃないよね？

むしろこーゆー娘たちが普通の高校生だったりするのかな？

そう言えば、こんだけ騒いでるのに他の生徒たち、ちよつとちらちらとこちらを見ていく人もいるけれど、基本みんな素通りだよね？ もしかして、これ、日常？ これじゃ三世院とあんまり……………。

……………やめよう、考えるのは。……………すっごく疲れそう。

「ほいほい、よいせつと」

「こ、こら、こなた！ 背中に引っ付くなー！？」

僕が自分の想像に疲労を感じている間にも、ぎゅんぎゅんひらひ

らと攻防を繰り広げていた二人だけど、『かがみ』の背後にまわり込んだ『こなた』が相手の背中にぴょんと飛び乗ったところで、とりあえずは終結をむかえたようだ。

「やはー、悪いねーかがみー。このまま私の教室まで運んでよ?」

「な、なんで私がそんなコトしなくちゃ……こなた、足、どうしたのよ?」

「んー? ちよつとねー?」

「……まったく! しょーがないんだからアンタは! 一応連れていくけど、入り口までよ? ……私は、別のクラスなんだから……」

「ありゃー。それは残念だねーかがみん? ……さみしい?」

「う、うっさいな!」

さっきまで死闘(?)を展開していたとは思えない睦まじさで去って行く二人。

……僕、忘れられてる?

「あつ! そーだ! その名無しのごんべーくん! ……まったくねーっ!」

あやうく自分が霞になったかと思いかけていた僕に、『かがみ』におぶさった格好の『こなた』が思い出したように振り向き、片手をぶんぶんふってきた。

「……ハハハ。またね……」

僕は彼女に力なく手をふり返すと、おそらく激怒しているであろうな姉が待っているはずの職員室へむけて、とぼとぼと歩き始める。

はあ、編入初日からこんな波乱含みなんて散々だ。これからはもっと普通に過ごしたい。

……さてと。

どこかなのかなー、職員室?

「ほら、着いたわよ。早く降りて、重いんだからっ！」

「えー？ もう少しだけかがみの背中のぬくもりを……」

「きつ、きもちわるいことゆーなっ！？ お、降りなさいってば！？」

「ちえー。……アリガトネ、かがみ？」

「ったく。……ところでさ、さっきの男の子、マジで何なワケ？
じ、実はやっぱり、カレシとか……なの？」

「へ？ 違うよー。言わなかったっけ？ 名前も知らないヒトだつて。今日会ったばかりだよ」

「はあっ！？ だってアンタたち手をつないでたし、それにさっき別れるとき言ってたじゃない。『またね』って」

「あー、アレね。……だってまた会えると思ったんだもん」

「なによ？ 約束でもしたの？」

「そーじゃないけどさー。……パンと遅刻と曲がり角、かな？」

「……意味わかんないんだけど？」

「べ、別にイーじゃん！ ……さーさー、隣のクラスの人は早く自分の教室へっ」

「うっ。……ハ、ハイハイ。わかったわよー。……ああ、そういえばアンタたちのクラス、一人編入生がいるらしいわよ？ 式には出てなかったみたいだけど、そんな話を先生たちがしてるのを聞いたわ」

「へー？ ……その子もオタクだとイイなー」

「……それが最初の感想かつ！？ 他になんかないの！？」

「あっ！ つかさー！ みゆきさーん！ また同じクラスだねーっ」

「き、聞けよっ！？ ……………な、なんで私だけ（しょぼん）」

「……かがみ。……萌へっ！！」

第一話 「パンと遅刻と曲がり角」 (後書き)

次回、柊姉妹どちらか(予定)。
よろしくお願いします。

第二話 「苗字と名前、たれ目の考察」

「やーやー。キミの名前は『睦樹』むつきだったんだねー。やっとわかったよ、ごんべーくん？」

「やーやー。そーゆーキミは『泉こなた』さん。……久しぶりだねえ？」

「うん。二時間ぶりくらい」

「ハハハ」

「あははー」

と、いうわけで。

さつき別れたばかりの小さな彼女と僕はあっさり再会を果たしていた。

場所は陵桜学園二年E組の教室、僕の席。足の具合も良いのか、とことこ歩いて来たこなたさんと上のような会話になったってわけ。時は新学年新クラス初めてのLHR終了後。ロングホームルーム

今日はもう普通の授業は無く、これで終わりだから放課後だ。

「こなちゃん。一緒に帰ろ……って、あれ？」

おっ？

「へーい、つかさっ！ やぶー！」

「やぶ」。……あつ、えと、そうじゃなくて、あのね」

きよどきよど、わたわた。

そんな擬音が似合う態度で、ハハハあははと無意味に笑い合っていた僕たちに声をかけてきたこの娘の名前は、確か。

「『柊つかさ』さん？」

「えっっ！？ な、なんで私の名前知ってるの、むくどり棕鳥くんっ！？」

僕が名前を呼ぶと、柊さんは目を見開いて驚きの表情になった。……い、いや、「なんで」って、そりゃ決まってるじゃないか。

「さっきのLHR、みんなの自己紹介だったからさ。だから柊さんも僕の苗字、呼べるんでしょ？」

「あ、そだね……。えへへ」

ふにやつとした笑顔で、照れを誤魔化すように耳の後ろを掻く柊さん。

うーん？

なんとゆーか、彼女はすごいぶん独特のペースを持つてるみたいだ。「あー。つかさはちよつと天然入ってるトコあるからね。でもまー、そのうち慣れるよこんべーくん！」

心情が顔に出ていたのか、そんなことを言いながらこなたさんが僕の背中（というか、実際は腰の辺り）をぽんと叩いた。

ところでそれはイイんだけど、こなたさん。

キミの中で僕はもう「こんべーくん」なのかい？

「そーダヨ！ キミは今日から『棕鳥睦樹改めこんべーくん』と名乗りたいまへ！」

「長いっ！？ だいたいそれ、どこまでが苗字でどこからが名前っ！？」

「『棕鳥睦樹改めこんべ』までが苗字、『ーくん』が名前」

「……名前の発音が出来ない」

「出来るよ？ 『ーくん』」

「凄っ！？」

と。

ここでちよつと僕の苗字について説明しておきたい。

唐突だけど、「そーいえばまだちゃんと言ってなかったな」と今思い出したので忘れないうちに。

LHRのとき、編入生である僕はみんなとは別に、一人黒板の前に立って最初に自己紹介をした。

そこで僕は自分の苗字を『棕鳥』と言ったんだけど、実はこれ嘘だったりする。

三世院家の養子たる僕の本当の苗字は言つまでもなく『三世院』。

『三世院睦樹』が現在の僕の本名だ。

偽名を使った理由は大きく二つ。

一つは「三世院」の名は世の表裏で結構有名なため。どこでどんな風に有名なのか、ここで詳しい説明はしないけど、とりあえず「すっごいお金持ち」ってことくらいならたぶん普通の高校生でも十分に知っているはずである。

なので、この学園では地味に普通に過ごしたい僕に三世院姓は面倒なだけ。また『家』の方でも僕が三世院として普通の高校に通うことを、僕とは違った意味で面倒だと思っている人たちも多いらしく、裏から手を回して提出書類を色々いじってあるようだ。

そんなわけで、こっちの理由はなんだか複雑なのだけど、もう一つの理由はもつと単純。

単に僕が三世院を名乗りたくないっていう、ただそれだけ。

だから、三世院側の思惑っぽいモノも含めたこれらの理由によって、陵桜学園での僕は「**棕鳥睦樹**」。

「**棕鳥**」は以前の、まだ養子に入る前の僕の姓。

僕が父さん——『**棕鳥遥都**^{はると}』と母さん——『**棕鳥弥生**^{やよい}』の息子だったという、確かな証。

「ど、どうしたの**棕鳥くん**？ 急に黙りこんじゃって……お腹、痛いのか？」

「大丈夫だよ、つかさ。ごんべーくんは時々こんな風に急に黙り込んで、イヤラシイことを想像する癖があるだけだから」

……………。

ナンテコトイイヤガル。このちびっ子。

「わ、わ？ こなちゃん、**棕鳥くん**がなんだかじとっとした目で私たちを見てるよう？」

「……想像してるんだネ」

「やつ、やあ~~~~っ!？」

「へー。それじゃこなちゃんたち、今日の朝にはもう知り合ってたんだ。すごいね」

時間は先ほどからちよつと経って、僕たち三人は人の少なくなつた教室で仲良く談笑中。

こなたさんのせいで僕に凄まじいマイナスイメージを抱きかけたいた柊さんも、僕の渾身の説得とげきによって打ち解けてくれていた。話しているうちにわかつたことだけど、どうやら彼女、基本的には真面目でとても素直な性格らしい。

僕たちの出会いの原因となつた「パンを啜くわえてごっつんこ」な話も、特にツツコンだりせず、ときおり頭の大きなリボンを揺らしながらこくこく頷いて、ずいぶん熱心に聞いてくれた。

これがもし、あの時廊下で出会つた鬼娘おにむすめだつたら「はあっ!？」そんなマンガみたいな話、信じられるかっ!？」とか言われそうな気がするのに。

……いや、気がするどころじゃなく絶対言われる。一度会つただけだけど、なぜかそんな確信が持てるオーラをあおの鬼娘は放つていた。

……二人とも髪の色は同じなのになんて違いだろう。

違いと言えば、鬼娘のつり目に睨にらまれると全身が硬直しそうなほど緊張するけど、彼女のたれ目に見つめられると心がほんわかして癒される。

口調ものんびりだし、人畜無害とはきつと柊さんのことを言うんだね。

「でもいくな。こなちゃん、お付き合いする人ができて。うらやましいよ」

あ、やっぱり前言撤回。

「ぶふうっ!？」 な、なんだってっ!?!?」

「仲良いね」

お互い肺の空気をぶふつと強制排出された僕とこなたさんに、柊さんはどこまでもほわほわとした笑みを向けてきた。

お、『お付き合い』って……。なんで急にそんな話になったんだ？

……まあ、確かに？ 自分が今日の朝、そんなようなことを考えていたような記憶があるような無いような気がしなくも無いというか実際あるのだけれど、そのところは柊さんにもこなたさん本人にも別に言っていない。

それにそもそも、あの少女マンガの主人公たちだって、「じつくりじっくりじわじわじわじわ」と時間をかけてようやく最終回で結ばれるのだ。

それが出会ってすぐにお付き合いなんて……物語的盛り上がりストーリーに欠けるじゃないかっ！？ 僕は断じて認めないっ！？

「柊さん！ なんで僕とこなたさんが、その、アレだよだからその……なんでそんな関係だっと思ってたのさっ！」

「そ、そうだよ、つかさっ！」

「え、えっつ？ ち、違うの？」

僕たちに反論された柊さんが「まさかそんなこと言われるとは、思ってもいませんでした」って感じの顔になる。……どーでもイイけど、我が言ことながらもっと上手い例えはないものだろうか？ 誰か、ご存知の方いらっしやれば是非教えてください。（ぺこり）

「そうなんだ。……えへへ。ちよつと勘違いしちゃったかも」

照れたように言いながら、柊さんはうつむき加減に両手を合わせて指先をくるくる回す。

そんな彼女に対して、なにかこう目の前の小動物が形容不能の愛くるしい動きをするのを見ているときに感じるような気持ちがふつふつと湧き上がってきた。

「ふもっふー！」

「うつわあっ！？ ご、ごんべーくん、いきなり叫ばないでよ。ビ

ツクリするじゃん」

「あ、ああ……ごめん。なんだかたぎる気持ちを抑えきれなくて。すーはー、すーはー」

心を落ち着かせるため深呼吸。

そして一息ついたところで、なぜか若干引いてるっぽい柊さんに僕は改めて尋ねた。

「柊さん。なんで僕たちが、そうだって思ったの？」

「あ、えっと、それは、あのね、普通に仲が良さそうに見えたのと……」

「見えたのと？」

「あとね、それが、だから……あれ？　なんだったつけ？　……あの、あのっ」

……じ、じれったいっ！？

「な、なんでも良いから思い出して柊さん！　僕とこなたさんがなぜお付き合いしてるって思ったのかっ！？」

「ああー！　それー！」

……え？　「それ」？　それって、何？

「思い出した」。えとね、棕鳥くん、私のことは『柊さん』って苗字で呼ぶのに、こなちゃんは『こなたさん』って下の名前で呼んでたから。わ、私、なんとなくなんだけど、男の子ってあんまり女の子のこと名前じゃ呼ばないんじゃないかなって思ってた……。だから、名前で呼ぶのはその、すっごく仲が良い……付き合ってる人なのかな、って」

むう。

なるほど。

柊さんの言っていることは僕にもなんとなく分かる。確かに、ある程度年齢が上がるにしたがって、男子は女子を苗字で呼ぶ傾向があるし、事実僕もそうだった。

それに特別仲の良い異性を名前で呼ぶとゆーのも知っている。事実あのマンガがそうだった！

……とは言え、それがお付き合いに直結してるってことでもないように思う。

たとえ初対面から名前で呼ぶ人がいたとしても、別におかしくもないだろう。

ただ――。

「ご、ごめんね棕鳥くん。それにこなちゃんも……」

「あ、あははー。まーイイよ、つかさつ！ そんな勘違いさせるような呼び方してたこんべーくんが悪いんだからっ」

しゅーんと沈んでしまった柊さんを、こなたさんがそう言っただけで慰めた。

……ふ、む？ 「呼び方」ね？

そーいや、僕は何で出会ったばかりのこなたさんを名前で呼んでるんだ？

――わからない。

わからないことは、うん、聞けばいい。

「ねえ、僕はなんでキミを『こなたさん』なんて下の名前で呼んでるの？」

「し、知らないヨッ！？」

そりゃそうだ。

「やつぱり、棕鳥くんはこなちゃんのこと、す、好きなんじゃないかな？ だから無意識で……」

「ああ、柊さん。それは違う。マジで。全然。超マジで」

「……そこまで否定されるとさすがにちよつと傷つくネ。別にイイけど」(ぎゅむっ)

こなたさん。

別にイイなら人から見えない位置で足を踏むのをやめてください。あと、その笑顔もやめてください。目が笑ってないのでなんだか怖いです。

「あつ。それなら棕鳥くん？ こなちゃんだけじゃなくて、私も名前で呼べばいいんだよ」

「「え？」」

こなたさんの笑顔に僕が怯えていることなど知る由もない柊さんが、いきなりそんなことを言った。

さつきも思っただけど、彼女の話は飛躍が大きい気がする。たぶん、彼女の中ではちゃんと筋道だった思考が展開されているんだろうけど、そこを省いて結論だけを言うからこーなるのだ。

でも差し当たり、柊さんの言葉に気を取られたらしいこなたさんが足を踏むのをやめてくれたので無問題。

「柊さん。念ために聞くけど、なんで？」

「それはね、えと、あの」

うんうん。このじれったさにも慣れてきた。

「棕鳥くんがこなちゃんだけ名前で呼んでるから、変に気になっちゃうんだと思うんだ」。っていうか、私がそうだっただけかもただけだ。……えへへ」

柊さんはそこで一度ほにやっと笑い、さらに話を続けた。

「でも、もしかしたら他にも私みたいな人がいるかも知れないし、そーしたら今みたいに説明しなきゃいけなくなつて大変だし……。それにさつき棕鳥くんの話聞いててね、棕鳥くんがこなちゃんを名前で呼んでるのって、あのね、好きとかじゃないんだとしたら、もつと単純に苗字で呼ぶのに何か抵抗があるんじゃないのかな、って思つたの。だからね」

「あ、あのさー、つかさ。話の途中で悪いんだけど、それはちよつとビミョーじゃない？ 今までの話の流れからいくと、苗字より名前で呼ぶ方が抵抗あるってコトで「それだあああっ！？」……ハイ？」

柊さんの話に割り込んだこなたさんにさらに割り込んだ僕の雄叫び。

そしてそんな僕に目を丸くして注目する女の子二人。

僕は彼女たちに、僕が思い出したことをごく簡単に説明した。

その説明に二人が完全に納得したのかどうかは定かじゃない。
ただまあその結果どうなったのかと言うと、こんな感じになった。

「それじゃ、改めてよろしく。つかささん」

「うん。よろしくね、棕鳥くん！」

「私は、変わんないけどネー。まっ、よろしく頼むヨ、こんべーくん！」

……ふう。

「じゃ、そろそろ帰ろうかねー？」

「うん。そだね。こなちゃん、棕鳥くん一緒に帰れなくて残念だね？」

「まー、なにか用事があるらしいから仕方ないんじゃない？　ところで、みゆきさんはどーしたの？」

「かがみも珍しく来てないし」

「……あつ！　そうそう、ゆきちゃんは今日歯医者さんなんだって。だから集めたプリントとか職員室に届けたらそのまま帰るって言うってたよ」

「た、大変だよね、みゆきさん。ななこ先生、電話でみゆきさんにLHR丸投げして、結局教室来たの終わる直前なんだもん。おまけにその後すぐ教頭せんせーに引きずられてどっか行っちゃうし。さすがの私もビックリだよ。……で、かがみは？」

「えっと、お姉ちゃん、実は一回この教室に来て私とは話してたんだけど、しばらくしたらクラスのお友達に来て……」

「えっ！？　かがみに私たち以外の友達がいたのっ！？」

「そ、それはひどいよっ、こなちゃん！？」

「ア、アハハ。ところで、その友達ってどんなヒト？　どんな属性

「？」

「ぞ、属性？ それはよくわかんないけど……一人はショートカットで『悪いナ！ ちょっと柊、かりてくぜっ！』って感じのしゃべり方をしてたかな」

「へー。『ボーイッシュな元気っ娘』ネ。それで八重歯だったりするとポイント高いんだけど……ぶつぶつ。……あ、一人ってことは、他にもいたの？」

「うん。って言うっても二人だよ。もう一人は、えとえと、ロングヘアの穏やかそうな人で『ごめんね？ そんなに長くはかからないと思うんだけど、ちよつとだけ良い？』とか言ってたよ」

「ふむふむ。それは『おしとやかな大和撫子』タイプだねー。……」

「やはー、なかなか萌える組み合わせだよそれっ！ ンフフ、私もゼヒにお友達になりたいなあっ！（ニマニマ）」

「？ そだね。なれると良いね（ニコニコ）」

—— Save .

第二話 「苗字と名前、たれ目の考察」(後書き)

今回、全体的にぼやけ気味で後半省略してるっぽい部分もありますが、一応今後の伏線ということで……。

では次回、ツンデレツインテール+背景コンビ(予定)。
よろしく願います。

第三話 「なんだかんだで、走馬灯（前編）」

「む、むつき。ウ、ウチを見捨てるんか？」

「ごめん、なな姉……。こうなってしまった以上、僕に出来ることは何も無いんだ」

「そ、そんな……。た、助けて……」

「本当に、ごめんっ……。！」

悲壮な顔のなな姉から目をそらし顔を伏せる。

「い、嫌……。嫌や、ウチ、もう……」

そんな哀れみに満ちたなな姉の声。

僕は顔を上げ、思わず手を伸ばしそうになる。

しかし、『奴』に見つかってしまったては、もう僕の力でなな姉を救うことは出来ないのだ。

……。うつつ、こんな無力な僕を、どうか許してっ！……！

「黒井先生っ！ まだ話は終わっていませんよっ！？ 始業日から大遅刻の上、人の話の途中で抜け出すとは何事ですかっ！？」

「き、きょーとーセンセっ！？ …… かにん、もーかにんしてやあっ！？ お説教はもー嫌やあっ！！？」

教頭先生に捕まり、教師とは思えない情けない声で泣き叫ぶなな姉の姿がなんとも痛ましい。

……。でもね。

『家から学園までの道を間違えて遅刻』なんていう珍事、僕にはとても底いかはきれないよっ！……！

「あー……。…… 黒井さん、捕まってしまったか。ご愁傷様」

教頭先生にずるずる引きずられて行くなな姉をやるせない気持ち（色んな意味で）で見送っていた僕の耳に、後ろから可愛らしくも

ハスキーな、そしてなんともダウナーな声が聞こえてきた。

「桜庭先生。……すみません、せっかく匿^{かくま}ってもらったのに」

僕は体ごと振り向いてその声の主、『桜庭ひかる』先生に頭を下げる。

「うむ。……しかし結局見つかってしまったしな。お前が謝る必要もないだろう。棕鳥」

「で、でも桜庭先生に迷惑がかかるんじゃない……」

「まあ、気にするな。……その辺りはお互い様、『持ちつ持たれつ』ってヤツだ。黒井さんとはな」

そう言っていると桜庭先生は口に咥えたパイポを器用に上下にピコピコ振ってみせた。

……うん、すごい——違和感。

なにがって、先生の容姿とそのパイポの組み合わせが、である。

先生の見た目は、一言で言うところ「こなたさん」。

別に二人が似ているというわけではない。そうではなくてよりするに……先生も必要以上に若く見えるのだ。

少しくすんだ黄色の髪に左右のおさげ。瞳の色はきれいなピンク。

そしてそばかすが似合う童顔に横長楕円の眼鏡がちょこんと乗っている。

見方によってはこなたさんより幼……若く見えなくもないくらい。ちなみに、服装は白衣で当然のように背が低い。

そんな人が咥えパイポでだるだる〜としているんだから、そりゃもう変な感じなのは当たり前、だよな？

「うーん。パイポがロリポップ（棒の付いたキャンディ）だったらすっごく似合うのに」

「よーし。……柊・日下部・峰岸。コイツを殺れ。殺さない程度に、殺っておけ」

……アハハハハあああああ、僕ってばまた……また、考えてることが駄々漏れに――。

「つつつつ！ 今っ度は、当てるわよっ！？ …… パンデ・トルリ
ヨ・チャギー！」

ああ、かがみさんの後ろ廻し蹴りがばぎゅんと唸りを上げて迫ってくる。

「うーん、オマエに恨みは無えけどナっ！ まっ、ちょっと倒れてくんない？ …… がる、がるるるっ！」

うっ、虎になりつたみさおさんが僕を引き裂こうと虎視眈々と狙っている。

「ご、ごめんね？ でも、痛いのは少しの間だけだから。 …… じゃ、斬るね？」

おお、模造刀を華麗に抜き放ち、その白刃を少し斜に構えたあやのさんは僕を横薙ぎに斬り捨てるため一足飛びで接近だ。

——さて。

いきなりだけど、こんな話を聞いたことはないだろうか？

人が、例えばバイク事故で宙を舞ったりしているような生命の危機のとき、周りの風景はやけにはつきりと、スローモーションのように見えるということがあるらしい。

そしてさらにそこを超えると、今度は過去の出来事がまるでたった今起こっているかのように回想される、いわゆる「走馬灯」状態に入るといふ説もある。

と。

いうわけでつまり、そんな話の実例が今の僕ってことだ。

……はっはっは。なるほどね。

それじゃー……………し、死ぬのかっ！？ 僕わっ！！？

以下、走馬灯。

教室でこなたさんとちと別れた僕は職員室へとやって来た。

いまだ校舎内の詳しい間取りはわからないけど、ここには一度来ているのもう迷ったりはしない。

がらりとドアを開けて中に入る。

「失礼します」

室内では、あたり前だけどたくさんの先生たちがそれぞれ机で作業してたり立ち話してたりした。

僕はそんな先生たちのなかから目的の人物を探し当てようと、きよきよ視線を巡らせる。

しかし。

（うーん？ いない、のかな？ なな姉）

そう思いつつも、念のためもう一度きよきよ。そしてどうやら本当にいないらしいことを確認し、ちよつと落胆。

僕がまだ帰らず職員室に来たのは、なな姉に会うためだった。

今日の放課後、つまり今、なな姉に校舎の案内をもらおう予定になっていたからだ。

なので本当なら、僕は教室でおしゃべりなんてしないで早くこへ来るべきだったのだけど、LHRの後なな姉が年配の先生に引きずられて行ったのを見て「ああ、この様子じゃこれから怒られるんだな……合掌」と思ったので少し時間をずらしたつもりだった。

ただ予想より遅くなってしまい、放課してからもう小一時間経っている。

（さすがにお説教も終わってるだろうし、どうしたんだろう？ もしかして、僕が遅くなったから怒ってどっか行っちゃった、とか？）
そんなことを考えながら、なな姉のデスクのあたりまで移動した。

まあ、ずっとドアの前にも邪魔だからね。

とりあえずもう少し待ってみて、戻って来ないようなら帰っちゃおう。

案内は後でもいいし、遅れたことを怒られるなら家でも同じ。

ビールのお酌でもしてあげれば機嫌を直してくれるだろうし、ここで小言を言われるよりそっちの方が良さそうだ。

……などと、打算を巡らせている僕の耳に。

「あー。……なんだー、黒井さんならここにはいないぞ？」

聞き覚えのあるダウナーな声が響いてきた。

「桜庭先生。『ここにはいない』ってことは、ななね……黒井先生はどちらに？」

なな姉の向かいの席。そこに座った女教師。

桜庭ひかる先生を僕は見やり、彼女に尋ねた。

「んー。……それは秘密……ム？」

だるそうに僕を見上げ、途中まで何か言いかけた桜庭先生が途中で止めた。

そして言葉を変え、僕に質問を返す。

「お前、さっきの編入生かー？」

「はい。先ほどはありがとうございました」

そう言って、僕は軽く頭を下げた。

桜庭先生は数時間前、僕が初めて職員室を訪れたとき色々お世話してくれた人。

なのでこれは、そのとき時間がなくて言えなかったお礼だ。

先生の外見について、正直思うことも多々あったけど、先にこなたさんと出会っていたおかげで耐性がついたのかあまり深く考えないようになっていた。

「ウム。……確か、椋鳥だったな。ちょーど良い。実はついさっき、

黒井さんからお前宛に伝言を預かった」

「伝言、ですか？」

「ああ。……えーと、どこやったかなあ？ んん……ああー、これ

だ。ホレ」

なんだかごちゃごちゃと物がたくさん置いてあるデスクの上から、一枚の紙切れを探し出した桜庭先生がその紙をひらひら振る。

それを受け取るため、僕は桜庭先生のもとへ近寄り手を伸ばした。

「すみませ……」

ひらっ。

「……すみませ」

ひらひらっ。

「……す、すみません？」

ひらひらひらっ。

「……………。あ、あの？」

「ああ。……スマン。からかってみた。暇なんだな」

僕の手からひらひら紙を振って逃れていた桜庭先生が悪びれもなく言う。

「ほい」

「あ、ありがとうございます」

そしてそれからあっさり紙切れを渡してくれた。

微妙に釈然としないまま受け取り、僕はその紙に書かれた文字を読む。

「『生物室へ来いや。わからんことは桜庭センセに聞き』」

……………え？

こ、これだけ？

「どうした？ さー、早く行ったらどうだ。黒井さんが待っているぞ」

「さ、桜庭先生？ ちょっとお聞きしてもいいですか？」

「ム？ ……面倒なことじゃなければ、聞いてやろう」
聞きたいことはいくつかある。

でもとりあえず、最初はこの質問だ。

「……せ、生物室って……どこ、ですか？」

その後、桜庭先生はだるだるしながらも生物室まで案内がてら一緒に歩いて来てくれた。

その道々、自分が生物教師であること、なな姉の遅刻の理由やそのせいでついさっきまで教頭先生に怒られていたこと、そして実はまだお説教が終わっていないこと、なのに教頭先生がトイレに立った隙をみてなな姉が逃げ出したこと、そんなダメ教師を同族のよしみで桜庭先生が生物室に匿ったこと、その生物室を今は先生が担任しているクラスの生徒数名が掃除していること、などを手短にまとめて話してくれた。

なので僕も、自分がなな姉の親戚で（これは嘘。でも学園提出書類はそうなっているから、まったくの出鱈目ってわけでもない）他に身寄りもいないため一緒に暮らしていること、編入前は神奈川で暮らしていたこと、昔の少女マンガは素晴らしいということなどを取り留めなく話した。

話しながらポテポテ歩き、そのうちに生物室前へ到着。

ドアを開けると、中ではなな姉と三人の女生徒が授業用の机を使いなげか仲良くお茶していた。

「あつはっは！　なんや、柊姉。元気ない思ったらそんなん気にしてたんか？　クラス割りなんて偶々（たまたま）や、偶々！」

「うっ！？　い、いや、別にそんな気にしてるってわけでもないんですけど……ごによごによ」

「……あ、あやのー！　ひ、柊が、柊が隣のクラスになりたがってるよお！？　私らのことなんて眼中にないんだぜ！？　ひ、ひどい

……三三三」

「み、みさちゃん泣かないで？」

三人の女子のうち、一人は見知った例の鬼娘だった。

でも幸いなことに今は殺気も放っておらず、ちよつと顔を赤らめてぶつぶつ言いながら指先を合わせているので理不尽な恐怖も感じない。

残りの二人は初めて見る顔で、濃い灰色のショートカットの娘が薄茶のロングヘアーの娘に抱きついて泣いていた。

おそらく彼女たちが生物室掃除を任された桜庭先生のクラスの生徒なんだろう。

「あー。……黒井さん。椋鳥を連れて来ましたが」

「ん？ むつきと、桜庭センセ？ ああ、これは手間を取らせてしまったようで……」

桜庭先生の声に気づいたなな姉が椅子から立ち上がってこちらに来る。

そして。

「しかし、今回は災難でしたなー」

「まったくや！ あのおっさん、いらんことまでぐちぐち、ぐちぐち……」

「ホント、困ったもんですな」

などと、そのまま立ち話に突入してしまった。

……どうしよう。手持ちぶさただ。

「あれ？ アンタもしかして……」

そんな訳でぼーっと突っ立っていた僕に突然、声がかかった。

「ひっ！？ すいませんすいませんごめんなさいっ！ だからどうか蹴らないでっ！？」

声の主は鬼娘。

思わず体を丸めてその場にうずくまり、命乞いをする。

我ながら、なんて見事な防衛本能だろう。

「ち、ちよつと！？ な、なんなのよいきなり！？」

ガタン、と鬼娘が立ち上がった音がした。

ま、まずい！ 近づいて来るっ！？

「おー。ほら、あやの。椋が一声かけただけで、男子がおびえてるぜ？ すげえなー？」

「そ、そうね？ でもちよつとおびえ方が尋常じゃない感じだけど……椋ちゃん、この子になにかしたの？」

「あ、あはは。まあ、さつき色々あつて……」

などと言つ話し声がどんどん近くなり、うづくまつた僕の視界に鬼娘のモノとおぼしき上履きが入つて来た。

続けて、僕の肩に「ぽんっ」と手が置かれた。

……ひやつ!?

も、もうダメだ、今度こそ殺られるっ!?

くっ! も、もうこうなつたら最後の手段を……! !

「ね、ねえ? さつきはホント悪かつ……うっわあ! ?」

「柊! ? どした……げえっ! ?」

「さ、桜庭先生! 黒井先生っ! た、大変、この子舌噛み切ろうとしてますっ! ?」

……。

……げはあっ! ?

—— s a v e .

第三話 「なんだかんで、走馬灯（前編）」（後書き）

一月半ぶりの更新。……はふん。

次回、まだまだ走馬灯。

……色々中途半端になっちゃいました。

特にみさおとあやのの登場シーンが意味不明……ま、まあその辺りも次回で。
では。

第四話 「なんだかんだで、走馬灯（後編）」

……あれ？ ここはどこだろう？

気がつくと、僕は草原のような場所に立っていた。

周りには背の低い草花が生えているだけで視界をさえぎるものは何もないから、三百六十度どの角度でも遠くの地平線まで見ることができる。

まるでアフリカのサバンナだ。

辺りはとても静かで、さわさわと風に揺れる草の音が耳に心地よい。

自然と目を閉じ、彼らの交わす囁きにしばし聞き入る。

「ん？」

ふと、何か別の音が彼方から聞こえた気がして、僕は目を開けた。首をひねって周囲を見渡してみるのが、特に変わった様子はない。気のせいかと思い、再びまぶたをゆっくり下ろそうとしたとき、今度ははっきり聞こえた。

どどどどどどつ！

その地鳴りみたいな音は、どうやら背後から響いてきている。

おそろおそろ振り向いて、僕は目を見開いた。

遠くに見える地平線、その空と陸との間にもうもうと上がる土煙。何か巨大な集団が凄まじい勢いでこちらに爆進しているらしい。

おそらく、ヌーの群れが天敵の肉食動物に追われでもしてるのだろつ。

土煙にまぎれてそれらの姿は見えないものの、いつの間にそれほど接近されていたのか、距離も思いのほか近かった。

僕はあわてて隠れるか逃げるかしようとして、気づく。

「……どこに？」

周りはさえぎるもののない大草原で、彼らは地平線を覆いつくさんばかり横に広がっている。

どこにも逃げようがなかった。

「え？ わっ！ うそっ！？」

パニックに襲われ、その場で右往左往している間にも土煙はどんどん大きくなり、その群れの姿も視認できるほどにまで迫ってきた。

「……………え？」

そして、僕は一瞬逃げることも身を守ることも忘れ硬直した。

その群れがヌーのものなんかじゃなかったからだ。

「なにやってんの、もう！」

「どきなさいよっ！」

「ああ、くさいわよねー」

「ダイエツトが必要だわ……………」

「つかさー、醤油とつて？」

「こなた、もう読んだ？」

「みゆき、これなんだっけ？」

「きこしめ、きこしめ、きこしめもうす」

紫色の長い髪を左右でしばった、釣り目で気の強そうな彼女たち。ほとんどは制服姿だったが、よく見ると中にはパジャマだったり水着だったり巫女服だったりするのもいたけれど……………とにかくそれは、たかさんのかがみさんの群れだった。

啞然として動けずにいたせいで、もうそのかがみさんたちは僕の目前に来ていた。

もはや、どうすることもできない。

「……………ふおおっ！　かがみさんの群れに轢き殺される！？」

「っていう、夢をみていたよ」

「あはははー！ 柊の群れ？ なんだそれ、おつかねーなあー！？ あははははー！」

最初の走馬灯で「そういえばあの時舌を噛んだなあ」とか思っていた直後、僕はかがみさんの強烈な踵落として昏倒させられたらしい。

そして群れの先頭を走る、いっとう強そうながみさんに跳ね飛ばされる直前に目覚めていた。

「み、みさちゃん。そんなに笑っちゃ柊ちゃんに悪いよ。……くすくすっ」

「……………むう」

僕の説明に爆笑するみさおさんとそれをたしなめながらもおかしそうなあやのさんに対して、かがみさんはムスツとした顔。

「あの、かがみさん？ もしかして……もしかなくても、怒ってる？ だ、大丈夫だよ、かがみさんは群れになっても皆その、可愛かったよ？」

「なっ！？ そ、そんなフォローいらないわ！ だいたい、私が怒ってるのは奇怪きうがいな夢のことなんかじゃないの！」

うわ、藪をつついたらヘビが出た。

てつきり夢の話に怒ってるんだと思っていたんだけど、どうやら僕は他事でもかがみさんの怒りを買っていたみたいだ。

「アンタ、なんで避けなかったのよ。朝こなたといた時は全然当たらなかったのに。まったく拍子抜けだわっ！」

腕を組んでそっぽをむいたかがみさんがため息をついた。

なるほど、怒っている、というより機嫌が悪そうなのはそういうわけなのか。

「なんだよひいらぎ？ 相手が弱っちくて怒るなんて、お前もすっかり武闘家だなー」

そんなかがみさんにみさおさんがにやにや面白そうな顔で言った。

「だ、誰が武闘家よ!? 何度も言うけど、私は一般人なんだからねっ。テコンドーだってダイエットの一環としてやってるだけで、日下部たちとは違うの!」

「またまた!。照れるなって。柊、去年教室の壁蹴り壊したことだつてあるだろー? ダイエットでやってるだけの奴がそんなんできるかよー!」

「……え!」

「ぼ、僕そんな蹴りを頭に食らってるんだけど!」

「大丈夫だよ、むつきくん。柊ちゃん、最近人と戦^やるときはちゃんと手加減できるようになってるから」

みさおさんの発言で血の気が引いた僕にあやのさんが優しく声をかけてくれた。

言葉に若干不穏当な響きが混じっていた気もするけど、とりあえずは安心だ。

「……でも、もし気持ち悪くなったり眩暈がしたらすぐに言ってね? 処置が早ければなんとかなるかもしれないから」

「あ、あやのさん? そ、それって……」

「……………万が一だから」
別の意味で眩暈がした。

話が前後するのだけど、舌を噛み切ろうとした僕は痛みで一瞬意識を飛ばしたものの無事だった。

その後、ちゃんとかがみさんと話をする事ができ、彼女に抱いていた「僕を亡き者にしようとしている」という誤解も解消された。そして、なな姉が見つかって連れ去られるまでの間、僕と三人の女の子は打ち解けた会話を楽しんでいたのだ。

話のメインは僕とかがみさんの出会いからして、必然的に武道とか格闘技に関することがらになった。

そのなかで薄々気づいてはいたものの信じてたくない事実の一つとして、この陵桜学園には何故か戦闘技術に秀でた猛者^{もさ}が多いということを知った。

別に告知もしておらず、格闘技をしているから優待されるってわけでもないのに数年前からどうしてか集まっているのだそうだ。

僕にはあまりピンとこないんだけど、そんな腕に覚えにある者の常として、みさおさん曰く「もっと強い奴と戦いたいっ!」と思うものらしい。

ゆえに、生徒間では「腕試し」という名の野良試合がわりと頻繁に行われている。

で、女の子三人の内みさおさんは典型的な猛者の一人で、陸上の推薦枠で入学したものの部活よりそちらに力を入れているようだ。

彼女は「形意拳」という、動物を模した型が特徴の拳法を使う：

「んだけど、どうも何か勘違いしているらしく、みさおさんのそれは「動物の型を模す」というより「動物になりきって」戦う。

そしてそんな文字通り型破りなみさおさんの調教師……もとい、お目付け役があやのさん。

お目付け役、といっても彼女もまた「夢想神伝流」という居合いの使い手で、腰には模造刀が携えられている。

「うーん、鉄くらいなら、頑張れば斬れるかな?」とにこにこしていたので、おそらく相当の腕前だ。

ちなみに、みさおさんとあやのさんは幼馴染で二人とも幼い頃から各々の技に磨きをかけてきたらしい。

そんな二人に対して、かがみさんはある意味最も普通で、かつ最も恐ろしい。

本人の言葉を信じれば、彼女がテコンドーを習い始めたのは半年前からで、しかも近所のスポーツジムのダイエツトコースにあったものを何となく選んだだけとのこと。

毎日の修練を欠かさない先の二人と違い、現在も週一〜二回そのジムで汗を流しているだけなのに、彼女たちの話によると三人の中

では基本的にかがみさんが一番強い。

間違いない天才だ。

ただ、ごくごく最近まで普通の生徒として過ごしてきたので実戦経験は少ない。

習っているのがスポーツジムなので、対人戦にも慣れていない。

だから、手加減が苦手。

恐ろしすぎる。

さて、少し話は変わるけど、そんな彼女たちやその他の猛者がうじゃうじゃ生息していると、心配なのは学園の風紀や治安だ。使い手同士のいざこざに普通の生徒が巻き込まれたり、強い人たちばかりが集まったクラスができてクラス間に妙なヒエラルキーが生まれたりしないとも限らない。

しかしその辺りの点は、一応考えられているようで、まずさつきちよつと触れた野良試合、これ実は学園公認らしいのだ。

学園内で腕試しを希望する生徒は、全員学園に申請書を提出し許可証を得る必要がある。

これで、学園が決めている時間と場所であれば許可証を持っている生徒はいつでも好きなときに試合うことが出来る。

その代わり、万が一許可証を持っていない普通の生徒をそれに巻き込んでしまった場合、故意の場合は100%退学、止むを得なかった場合もよくて停学、あるいは怪我などさせてしまったら退学もありえる。

ただし、一部の生徒のみの特別規約として「セクハラ、並びに不純異性交友等の制裁に関してこれを認める」というのがあって、朝かがみさんが容赦無く僕に蹴りかかって来たのはこの権限の行使に当たるので問題ないらしい。

また、学園外での暴力行為は許可証の有無に関わりなく絶対に禁止であり、これも破ったら厳罰が待っている。

そして、許可証の他に学園が問題対処策として取っていることが

もう一つ。

それが「許可証持ちの生徒は、担任の命令に絶対服従」という、聞く人が聞いたら眉をひそめそうな内容のもの。

たしかにずいぶん横暴なようにも封建的なようにも聞こえるこれは、ただし非公認。

学園が表立ってそんなことを言っているわけではないようだ。

しかし、生徒たちにとっては不文律でしっかり守るのだそう。

理由はわからない。

ただ、かがみさんにそのことを尋ねたら「……アンタもそのうちわかるわよ」とだけ言われた。

そのときの表情から、なんとなく察することもできたけれど、ここまでの話でかなり精神力を奪われていた僕はそれ以上考えるのを放棄して、ただ引きつった笑みを顔に張り付かせるのが精一杯だった。

「じゃ、申し訳ないけど校内案内お願いできる？」

「ま、仕方ないわね。……ところで、アンタさ？」

「うん？ どうしたの、かがみさん？」

「さっき聞き損ねたからもう一度聞くけど、私の踵落とし、どうして避けなかったの？ それまでは真っ青な顔しながら、私たち三人の攻撃全部避けてたのに」

「………………。た、たまたま？」

「なによ、その間は？ それに今思い出したんだけど、あの時だけ動きが不自然だったような……もしかして、わざと？」

「や、やだなあ、かがみさん。そ、そんなわけないよ。むしろ、それまで避けたのが奇跡、みたいな？」

「？ いまいち納得できないんだけど……」

「そ、そんなことより！ 最初はどこに行くのっ！？ ああ、もう

期待で胸が張り裂けそうだった！ さ、早く早くっ！」

「わ、わかったわよっ！ だからそんな手をひっぱるのはやめなさいって！？」

「……やれやれ。賑やかだったな」

「あの、桜庭先生？」

「おっ なんだ峰岸、お前椋鳥の校舎案内に行かんのか？ 他の連中はもう出ただろう？」

「あ、はい。私もすぐ追いかけますけど……。ただ、ちょっと気になることが」

「うん？ 言ってみろ」

「さっきの、平気なんでしょうか？ さっき私たちをむつきくんにけしかけましたけど、彼まだ許可証持っていないんじゃない？……。だとしたら、私たちはともかく先生が……」

「ああ、そのことか。大丈夫、問題無い。アイツの申請書は提出されているからな。許可証自体は校長の承認がなければ発行できないが、その効果は申請書を教師に渡した時点で発動する。万が一、上に許可が取り消されたとしても、それまでの間は有効だ。校則にも明記されているぞ。お前なら知っているだろうに？」

「えっ？ むつきくん、私たちの話にすごく驚いてたみたいだから、てつきりその辺りのこと知らないと思ったのですが……」

「……うむ。だが提出されたのは事実だ。何せ私が今日受け取ったんだからな。そうでなければ、あんな無謀なことはさせん」

「そ、そうでしたか。なら良かったです。それだけが心配だったの。それじゃ、私も行きますね」

「ああ、行ってこい。……ところで、アイツらがいまどこにいるのかわかるのか？ だいぶ時間がたってしまったぞ？」

「はい。こうして、床に耳をつければ……うん、いま音楽室にいる

みたいです。……では」

「……………峰岸も常人離れしてきたな。結構なことだ。しかし、棕鳥の申請書、か。……………ふんっ、確かに受け取ったぞ。もっとも、本人からではない、が。……………ま、いい。さて……………ふゆきのとこで茶でも貰うか」

第四話 「なんだかんだで、走馬灯（後編）」（後書き）

次回、みゆきさん登場予定、です。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1886t/>

はぴ すた ~Happy Star?~

2011年9月16日03時28分発行